

八幡「貸出しプレイ  
…？」

sabata

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

大学へ進学し順調な交際を続けていた比企谷八幡と雪ノ下雪乃だが、突然比企谷がE D（インポテンツ）になってしまう。その対策として比企谷がとった行動とは……？  
諸事情により削除していた小説を再公開します。

pixivでも公開中です。

# 目次

1部 貸出しプレイ

1話

1

2話

29

3話

51

4話

67

5話

103

6話

124

7話

134

番外編① 寝取らせに目覚めた比企谷

八幡の夢

151

番外編② 5話のその後 葉山・雪ノ

下視点

157

8話



# 1部 貸出しプレイ

## 1話

かつて青春を呪った俺にもかけがえのない恋人ができた。2人で共に地元の大学に進学し、デート、半同棲、性行為等の恋人としての経験はひと通り済ませた。

「すう……すう……」

俺の隣で雪ノ下が裸で静かに寝息を立てている。大学の講義の後、雪ノ下の家を訪れ、食事をし、その後情事を行ったという次第である。

しかし順調に思われた交際もここに来て陰りを見せていた。最初は思い違いだと思つた。しかし雪ノ下と交わっている時、かなり無理をしている自分に気がついた。そうしてあることを考えてしまう。

俺はEDになってしまったのかもしれない。

何故勃ちにくくなつてしまったのか、俺には全くわからなかつた。雪ノ下に不満があるわけではない。これほど美しい彼女に不満などあるはずがない。

「どうしよう……」

「比企谷くん? どうかしたの?」

俺がうっかりつぶやいてしまった声が雪ノ下の耳に入ったらしく、彼女を起こしてしまっただ。

「あ、悪い。起こしたか？」

「いいのよ。それより何か悩みでもあるの？」

「いや……別に……」

「……そう。それならいいわ」

雪ノ下はそう言い、俺の方へ身を寄せ、俺に頬擦りを始めた。え？何この可愛い生き物？ひとしきり頬擦りをし終えると、目をつぶった。どうやらこのまま寝るようだ。

俺も彼女の肩を抱き、睡眠をとることにした。悩みについては後で考えることにしよう。

次の日、俺は病院に行くことにした。診療の結果、肉体的な異常はなかった。どうやら心因性のもものらしい。カウンセリングの結果、断定はできないが性生活のマンネリ化が原因の1つとして考えられるらしい。

雪ノ下との性生活はどちらも経験が少ないことから、どうしても単調になってしまっていた。薬である程度は勃起できるようにはなるが、根本的解決にはならないとのことから、マンネリ解消を一度試してみるように言われた。

「ネットで調べてみるか……」

「マンネリ 解消法つと……」カタカタ

俺は自宅に帰り、マンネリの解消方法について調べていた。

「風俗か……これはないな。雪ノ下以外となんて考えられない」

「道具を使ったSMプレイ……駄目だ。痛いのも傷めつけるのもハードルが高すぎる」

「コスプレ……はやり尽くした感があるしな。制服、ナース、猫、メイド……」

数十分調べてみたが、芳しい結果は得られなかった。

「うーん、どうしたものか……」

もういつそエロゲーでも参考にしてみるか……

「うわっ……結構エロゲーって結構高いんだな……」

俺はエロゲーをダウンロードで購入できるサイトを巡っていたが、思いの外高い値段に辟易していた。

「おつ半額セールか。貧乏学生としてはこういうのに弱いんだよな」

「しかしどれが参考になるとかは全然わからん。人気順にしてみるか」

「何々……貸出しプレイ……こんなものもあるのか」

人気順でサイトの一番上に来たゲームはどうやら自分の妻を他人に抱かせるというテーマのものらしい。

「自分の妻を他人に抱かせる……?こんなプレイで興奮できるのか……?」

「ものは試した。この他にめぼしいものはなかったしな。あくまでゲームなんだから、参考程度にやってみるか」

俺は自身を納得させ、このゲームをやってみることにした。

数時間後……

「……………ふう」

気づけばぶっ続けでクリアまで一直線だった。心臓がバクバクと鳴り、興奮してしまつた所ではしつかりと俺の息子は膨張していた。どうやら俺は変態的性癖の種を蒔いてしまつたらしい……。

「貸出しプレイ……………か……………」

しかしどうなのだろうか？ゲームは所詮ゲームであり、現実とは違う。これを参考にメンネリ解消など可能なのだろうか？

試しに俺は雪ノ下が他人と寝る所を想像してみた。俺の最愛の彼女が他人と同じベッドに入る。彼女は想像上の誰かの愛撫に身を振り、切なげな声をあげる。そしてついに他人の肉棒が彼女を貫く……。

そうした想像をしている内に俺は息子がこれまで生きてきた中で一番勃起していたことに気がつく。これはもはや……やはり雪ノ下に相談するしかないな……。

週末のデートの後、いつものように俺は雪ノ下の家を訪れ、食事を済ませていた。



「はい。比企谷くん」

そうやって雪ノ下はコトトリと紅茶の入ったティーカップを俺の前に置き、テーブルを挟んで俺の前に腰掛けた。

「おう。ありがとう」

俺はカップに口をつけ、彼女の淹れてくれた紅茶を飲んだ。

「やっぱりお前の紅茶はうまいな」

「そう？それはどうもありがとう」

こんな何気ないやりとりも何度繰り返したのだろうか。俺はこのような日常をひどく気に入っていた。

「あーその……さ。」

「なに？」

俺が呻くようにそう切り出すと雪ノ下は首を傾げて訊いてきた。

「この前俺何か悩んでいる感じだっただろ？」

「そうね。あまり訊いてほしくなさそうだったから追及はしなかったけれど」

「その件だ。その……なんだ……非常に言いにくいんだが……」

「……実はEDになってしまったようなんだ……」

苦虫を噛み潰したような顔で俺は雪ノ下に自らの病気について告げる。

「え……。その……EDというのはいわゆるインポテンツのことよね？」

さしもの雪ノ下と言えど、俺の告白には驚いたようだ……

「そうだ。病院には一応行った」

「原因はわかったの？」

「どうやら性行為のマンネリが原因だと考えられるらしい。その……お前はそんなことはないか？」

「そんなことはないけれど。わ……私はあなたに抱かれていますだけで幸せよ」

おおう。雪ノ下はとても嬉しいことを言ってくれた。耳まで赤くなって俯いている様子から、おそらくそれは本心なのだろう。

「ここからが本題なんだが……実は極めて有効な対処方法まで分かつてはいるんだ」

「そう。なら安心ね」

「ああ。俺は様々なツテを使ってマンネリズムを解消する方法を調べつくした」

「友達のいないあなたの手段はとも限られていると思うのだけれど」

「ゴホン……そしてとても有効と思われるプレイに辿り着いた」

「まあ……聴きましょう」

さあ言うぞ……いざ言うとなるとかなり恥ずかしいな……これから俺は新たな性癖を晒すのである。

「比企谷くん？」

数秒押し黙った俺を訝しく思ったのか、雪ノ下は俺に声をかけてきた。そして俺は意を決して告げる。

「雪ノ下、俺以外に抱かれてみてくれないか？」

瞬間、ピシリという音が聞こえた気がした。時間が停止したかのような錯覚に陥る。

「はい？」

雪ノ下が口元に笑みを浮かべ問いかけてきた。全然目笑ってないからね。こわいよゆきのん。

「いや……その……」

「まったく……あなたのことは初対面から変態だとは思っていたけれど。まさかここまでとは思ってなかったわ。はあ……。あなたはどうしてEDの治療でそこまで意味不明な対処方法に辿り着いてしまったのかしら。鳥人間コンテスト並に飛躍してるわよそれ。1から何故そんな結論に至ったのか説明してごらんさい。笑わないから」

雪ノ下はやれやれといった感じで目を閉じ、俺に説明を要求する。

「実は……」

俺はこのプレイ内容に至った経緯を話した。

「経緯については理解はしたわ。かなりの変態ね。変態谷くん」

「心配するな。自覚はある」

「それに……自分達の性生活がうまくいかないからって他人をそれに参加させるなんて意味がわからないわ」

「まあそうなんけどよ……お前俺しか男を知らないだろ？ いいのかそれで？ このままだと経験人数1人で結婚コースだぞ。これはいい機会なんじゃないか？」

俺は通じないだろうと思いつつ安い挑発をする。

「けっ……」

雪ノ下は耳まで赤くなり俯いた。意図しない部分が効いたらしい。ゆきのんかわいいのん。

「……ゴホン。若いうちに遊んでおくべきだなんてくだらない価値観だわ。だいたい私たちにそこまで深入りしてくれる人なんていないじゃない。ネットで募集した人となんて絶対嫌よ」

雪ノ下は結婚というワードに動揺したのか、いつのまにか相手の選定まで交渉が進んでいた。

「そうだな……ネットで募集は確かに危ないよな……かといつて知り合いといつても……」

「あー葉山はどうだ！ 葉山！」

俺が今思いついたかのように葉山の名前を出す。もちろん予め選定済みである。オレの中ではこいつがベストである。アイツは誰も選ばないことを信条にしている。俺としても安心だ。

「……」

雪ノ下はそんな俺の言葉に無言になり、ジト目を俺に向けてくる。

「あなたね……。葉山くんは嫌よ」

雪ノ下と葉山の間には確執がある。詳しいことは聞いてないが、小学校の頃に何かあったようだ。

「しかしだな……。他に共通の知り合いなんていないだろう」

「そもそも何故その……。貸出しプレイ? をすることになっているのかしら。私はするなんて一言も言っていないのだけれど」

雪ノ下が冷静になってしまったらしく、交渉がふりだしに戻ってしまった。

「どうしてもダメか?」

「ダメね。……。あなた以外なんて考えられないもの」

雪ノ下は拗ねたように横をむきながらそう言った。

「そうか……」

俺は男冥利に尽きる雪ノ下の言葉を聞きながら、落胆を隠せなかった。これでEDの

治療も振り出しである。俺は少々落ち込み、うなだれていた。

「そんなにしたいの……?」

「まあ……お前とは末永く付き合っただろうし……EDなんてさつきと治しておきたいんだよ」

「うっ!末永く……」

雪ノ下は俺の言葉に再度顔を赤くし、手でパタパタと顔を扇いでいた。

「頼む……EDが治るまででいいんだ……」

「……………」

「わかったわよ……」

長い長い沈黙の後、雪ノ下は諦めたようにそう言ってくれた。

「それで……相手については葉山でいいんだよな?共通の知り合いってそれくらいしかいねえぞ」

「もうそれでいいわよ……」

「わかった。じゃあ俺から話をつけておくから」

「でもあなた葉山くんの連絡先知っているの?私も知らないわよ」

「あ、そういえばそうだな……」

「じゃあ由比ヶ浜に訊いてみるか」

「この話は言わないように」

「わかってる」

俺はそう言いスマホを取り出すとLINEで由比ヶ浜に連絡した。ちなみに由比ヶ浜は東京の私立大に通っている。

「なあお前葉山のIDわかるか？」

「わかるよ！でもヒツキーが隼人君に連絡取りたいなんて珍しいね！」

「諸事情でな」

「h a t o o o o o o」

「これだよ！」

「おお すまんな。」

「これくらいいいよ！それより今度ゆきのんと3人で遊ぼうよ！」

「ああ。構わんぞ。じゃあな」

「ええ！今いつ遊ぶか決めようよ（・ω・）」

「春休みにな」

「OK！わかった！じゃあね！」

「おう」

「葉山の連絡先わかったぞ」

「はあ……」

由比ヶ浜に葉山の連絡先を訊き出すことが出来たのでそれを雪ノ下に告げると、彼女は額に手を当てながらため息をついた。

「葉山くんには全部話すことになるのよね？」

「まあそうなるな。」

「どうしてこんなことに……」

雪ノ下はそう言いジトーという眼で俺を睨む。

「これしか方法がないんだから仕方がないだろ」

俺はそう言い葉山に連絡を取った。

「よう。比企谷八幡だ。久しぶり」

「誰かと思ったら比企谷か。どうしたんだ？」

「ちよつと頼みがあつてな。今時間いいか？」

「ああ 別に構わないよ」

「雪ノ下を抱いてくれねえか？」

「どうしてそうなった?!?!?」

「まあ詳しいことは会って話したい。明日時間あるか？」



「午前なら大丈夫だが……」

「じゃあ明日10時に雪ノ下の家に来てくれ」

「わかった……」

「おい、葉山に話がついたぞ。明日きてくれる」

「ちよつと待ちなさい！明日いきなりするつもりじゃないでしょうね!？」

「葉山は午前しか都合がつかないらしい。だから明日は詳しい話だけすることになった」

「そう……。わかったわ……」

「じゃあ寝るか」

「そうね……」

話は一応のまとまりをみせたので、俺達は椅子から立ち、寝室へと入り、床に就くのがあった。

翌日朝10時前、俺達が葉山の到着を待っているとインターホンが鳴り、葉山が来たので俺達は2人で雪ノ下宅に迎え入れた。

「久しぶり。雪ノ下さん、ヒキタニくん」

「ああ。今日はすまねえな。あがってくれ」

俺はそう応え、雪ノ下は軽く会釈するに留めた。

その後リビングに向かい俺と雪ノ下が並んで座り、向かいの席に葉山を案内した。「それで昨日の件なんだが……」

俺がそう切り出し、事情を説明するのを葉山は黙って聴いていた。

「俺が協力するのは構わないが、君達は本当にそれでいいのか？」

と俺の話聞き終えた葉山が言った。

「ああ」

「コンセンサスは得られているわ」

「……そうか。じゃあ協力しよう」

俺達の回答に短い沈黙のあと葉山はそう言った。

「感謝する」

葉山の了承に対し、俺は感謝を述べ、頭を下げた。

「早速だが、来週の土曜は空いているか？」

「来週の土曜は1日大丈夫だな。空けておこう」

「じゃあ来週土曜の14時にまたここに来てくれ」

「わかった」

話がついたので、俺達は葉山を見送った。

そしてついに雪ノ下と葉山が交わる前日となった。俺はこの1週間、講義に出てはいたが、まったく勉強に身が入らなかった。

ついに明日雪ノ下と葉山が……。そのことばかり考えながら、俺は雪ノ下の家へと向かうのであった。

そして雪ノ下の家に入ると、雪ノ下はリビングの椅子に座り、何かを考えている様子だった。少し俯きながら考えこむ彼女の顔には不安の色があった。

彼女は明日、恋人でもない、むしろ嫌いとも言えるような相手との性交を強いられるのだ。気分が憂鬱にならない訳がないだろう。

俺が勝手に目覚めた性癖に彼女は付き合わされているだけなのだ。俺は彼女への配慮がまったく足りていなかったことを痛感する。

「あ、おかえりなさい……」

「すまん雪ノ下。俺のせいで悩ませて……」

「大丈夫よ。これでEDが治る見込みがあるのならやるべきだよ。あなたのがちやんと勃たないと……その……子供がもうけられないのだし……」

「雪ノ下!」

俺は彼女が愛おしくて堪らなくなり、彼女の手を引き立ち上がらせた。そして彼女の

頭を抱き唇を奪った。

「っんー」

彼女は目をつぶり、俺にしがみつきながらキスを受け入れてくれた。そして彼女の口の中に舌を侵入させ、じつくりと味わう。

「あつ……ちゅ……んう……はあ……」

俺が彼女の舌を犯すたび、彼女は切なげな声をあげた。いつも凜としている彼女が乱れている姿を見るのはとても楽しい。俺は雪ノ下にキスをするのがとても好きだった。

ひとしきり彼女にキスして満足すると、俺は彼女から口を離れた。そうすると彼女が足のバランスを崩しかけたので彼女の腰に手を回し支える。

「……はあ。あなたのキスはうますぎるのよ。もう少し手加減なさい」

俺の腕に抱かれながら、とろんとト口けた顔をした雪ノ下がそんな恨み事をもらす。

「すまん、雪ノ下があんまり可愛いもんだから」

「ツ……またそういうことを……!」

顔を真っ赤にしながら雪ノ下は俺を下から睨む。

いよいよ貸出しプレイ当日の土曜日となった。俺たちは昼食を摂った後、葉山を待っていた。そして運命のインターホンが鳴った。

葉山を迎え入れた俺達は最後の打ち合わせをしていた。

1、寝室には小型のトランシーバーが設置されており、受信機で俺が音声を聴いていること。(俺は映像が良かったのだが、雪ノ下が嫌がった)

2、性行為に関する禁止事項は雪ノ下から伝えること。

3、性交の回数は葉山が1回イクまで。の3つ全てが合意された。

「じゃあ葉山。よろしく頼むな」

俺は玄関で靴を履いて2人に向き直りそう言う。

「ああ。できる限り力になるよ」

葉山はにこやかに笑いながらそう返す。

「雪ノ下。ごめんな」

「いこのよ」

俺の最後の謝罪に彼女は短く答える。

そして葉山と雪ノ下の2人が並び、俺を見送る構図に若干興奮しつつ、俺は雪ノ下宅を後にするのであった。

俺は近くのネットカフェで個室を取り、大急ぎで受信機のイヤホンを耳につけた。

その数秒後、扉の開く音がした。どうやら雪ノ下たちが寝室に入ってきたらしい。

「雪ノ下さん。じゃあ始めようか」

数分の沈黙の後、葉山がそう切り出した。

「待って葉山くん。始める前に言っておくことがあるわ」

「ん？なんだい？」

「あの変態のせいでこんなことになったけれど、私は彼を愛しているの。そしてあなたのことは嫌いだよ。絶対に私はあなたとの行為で感じることはないわ」

雪ノ下はそう宣言した。それは葉山だけではなく、俺への宣言も含まれているように感じられた。

「……そうか」

「では早くすませましょう」

雪ノ下はそう言い、ベッドに座ったのか、ギシという音が聞こえた。そして葉山もベッドに座ったのだろう。同じような音が聞こえてきた。

俺はその音に嫉妬を覚えた。俺と雪ノ下が結ばれて以来、ずっと使ってきたベッドに他の男が座って、これから性行為に及ぼうとしているのだ……。

ついに始まってしまふ。そう考えるとバクバクと心臓の音が激しくなる。

「待って。唇にキスはしないでちょうだい」

どうやら葉山は雪ノ下にキスをしようとしたらしい。性行為の手順として最初にキ

スをするのは順当なところだろう。しかし雪ノ下はキスされるのを嫌がった。

「わかった。でもそういう事は先にいっておいてくれよ。他に何か嫌なことは？」

「あとは特にないわ。自由にしてちょうだい。」

「わかったよ」

どうやらキスのみ禁止という方向で決着したらしい。そして不意に衣擦れの音が聞こえた。

「待ちなさい。自分で脱ぐわ」

そしてパサリという音が聞こえた。

その音が妙に生々しくて少し興奮してしまう。

先に葉山が脱ぎ、雪ノ下の服を脱がそうとしたが、彼女はそれを拒み、自分で脱いだという流れのようだ。今日雪ノ下はセーターを着ていた。

嫌つていとまで宣言した者の前で、自らの衣服を一枚また一枚とを脱ぎ、どんどん無防備になっていく雪ノ下。俺の彼女の雪ノ下雪乃が他の男に裸体を晒していく……。

次にギシギシとベッドが軋む音と共にチュツという音が聞こえてきた。先程雪ノ下は唇へのキスを拒んでいた。

これはおそらく葉山の雪ノ下の身体への愛撫の音だ。

全身の毛穴が開いているかのような錯覚に陥り、汗が吹き出してくるのを感じた。つ

いに始まってしまったのだ……。

ああ……雪ノ下が葉山に馬乗りにされて愛撫を全身に受けている図が想像される。

雪ノ下はどんな顔で奴の愛撫を受けているのだろう。俺は全く想像のつかない彼女の顔を必死に思い浮かべようとしていた。

それからしばらくの間チュツと唇を身体にあてているような音、ペチャペチャと身体を舐めるような音が断続的に続いていた。

そうする音が十数分続き、何か他の情報は入ってこないものかと思えばぐねていたときのことであつた。

ジュポ

「ああっ!!」

!!???

突然雪ノ下の高い声が聞こえてきた。明らかにこれまでの反応とは違っている。一体何をされたんだ……

雪ノ下の声に驚き、俺が慌てっていると、次はグチュグチュという音と艶めかしい声が聞こえてきた。この音は聞き違いようがない。雪ノ下が感じて性器を濡らしていると



きの音だ……。

「んん……んんん……!!」グチュグチュ

葉山の愛撫で雪ノ下が感じてしまっている。それも性器からの音がはつきり聴こえるほど。今までそんなことはめつたになかったのに。

そして手で口をおさえているのか、その声は少しくぐもっていた。

彼女が葉山の腕の中で悶えているという事実、俺は絶望しつつも確かに興奮を覚えていた。

「雪ノ下さん。挿れるよ……」

雪ノ下の返事は聞こえなかったが、首肯がなされたのであろう。

グチュリ

「……ッ……んんん……!!」ズプ

グチュリ!という強い水音が聞こえてきた。その決定的な音に喉がカラカラになる。ああ……ついに雪ノ下は葉山の一物に貫かれてしまったのだ……。

雪ノ下の声を我慢しようとしてできなかったような声が聞こえてくる。

そして次にはパンパンパンという規則的な音と、葉山のそれに突かれるたびに雪ノ下の我慢できずに漏れた声が聞こえてきた。

「はあはあ。雪ノ下さん。気持ちいいよ。そんなに我慢しなくていいのに。ほら。」パン

「っん！んん！やめて！手を抑えないで！ああ！ああ……んあっ!!」ジユプジユプ  
なんてことだ……。雪ノ下は葉山の力強いピストンに明らかに感じてしまっている。  
両手を捕らえられ、せめてもの抵抗もできなくなっている。

葉山の肉棒の絶え間ないピストンによって、雪ノ下の腔内がグチャグチャにかき混ぜ  
られている音がする。ああ……雪ノ下の腔の形が葉山に書き換えられてしまう……。

それから十数分間、ピストン運動の音、水音、そして両者の喘ぎ声はずっと続いた。

「そろそろイクよー！」

突然葉山はそう言った。ピストンの音がさらに強くなりベッドが激しく軋む。

「はあーいやーいやー……っんんんん!!」

甲高い雪ノ下の声と共に一切の音が止んだ。どうやら行為が終わったらしい。

「雪ノ下さん。可愛いよ」

「……」

音が止んだ数分後、葉山は余韻に浸っているのか、そんなことを呟いた。

俺はいてもたってもいられないと思ひ、受信機のスイッチを切りネットカフェを急いで出て、雪ノ下の家に向かうのだった……。

すぐに雪ノ下の家の前に到着した。貸出しプレイの約束の回数は1回だった。既に行為は終わっているのに、約束通りなら葉山は既に帰宅しているはずである。

しかしあの雰囲気ですら1回ですむのだろうか……。そんな不安感を抱きつつ俺は合鍵を使い、雪ノ下の家に入った。

俺は取り返しのつかないことをしてしまったという思いに苛まれていた。これで雪ノ下が葉山を好きになつてしまつたら……。

そして寝室の前へと立つ。バクバクと動悸が鳴り止まない。

もし、雪ノ下が俺との約束を破つてまだ行為に励んでいるとしたら……。俺の見たことのない彼女がこの扉の向こうにいるとしたら……。

俺は行き場のない嫉妬を押しえつけ、ゆっくりと扉を開けた。

そこには雪ノ下が1人、きちんと服を着てベッドに座っていた。彼女はこんなプレイ

を提案した俺との約束を守ってくれていたのだ。

「雪ノ下、葉山は？」

「おかえりなさい。葉山くんならもう帰ったわよ」

「そうか」

そう言う雪ノ下に安心し、俺は雪ノ下に近づいた。そしてふとシーツの乱れたベッドを見やると、そこには葉山の精液でいっぱいになった使用済みコンドームがあった。

俺は一瞬で固まり、ここで行われてしまった行為を思い浮かべてしまった。

「比企谷くん？どうしたの？」

固まっている俺を訝しく思ったのか不思議そうに彼女が尋ねる。

そう言う彼女におそるおそる視線を向ける。そして顔から身体の隅々までじっくり見る。

そ!!!!!!  
ここで気づいた。雪ノ下の鎖骨の近くにキスマークが1つあった。行為のあと鏡を見ていないのか、彼女はそれに気づいていないようだった。セーターの開きの部分からキスマークが晒されていた。

限界だ。葉山のやつ、上げつないことをしやがる。俺の彼女の雪ノ下にあんなに堂々と印をつけるとは。

「クソツ……」

「え？どうしたの比企谷くん……んん!？」

俺はそう眩き、強引に雪ノ下の唇にキスをした。

「んちゅ……ちよつと比企谷くん……ちゅ」

俺は雪ノ下の抵抗を無視し、トントンと彼女の唇を舌でノックした。彼女は少し逡巡した様子だったが、口を開き俺を受け入れた。

「……んん……ちゅ……んああ……」クチュクチュ

俺は彼女の頭を抱き、じつくりと彼女の舌をねぶった。

俺は葉山が許されなかったキスを彼女と交わしている。それだけが俺の不安を消す唯一の要素だった。

そうして彼女の口内を舌でねつとりと犯した後、俺は唇を離し、彼女をベッドに押し倒し馬乗りになった。

「比企谷くん。待ちなさい。まだシャワーを浴びてないのよ」

「すまん雪ノ下。もう我慢ならん」

「……まったく。そんなに葉山くん嫉妬したの？」

ドクン！と心臓の鼓動が強くなる。

「ああ。悪いかよ。葉山に雪ノ下を取られるんじゃないかと気が気じゃなかったぞ」

もしそうやっていたら俺のトラウマリストが更新されていた。いや本当やめてね。まじで。

「ふふ……馬鹿ね」

雪ノ下はそう言い、嬉しそうに俺の頭を抱くのだった。

「悪い。すぐ挿れていいか？」

「先程の行為から時間が経っていないから大丈夫だと思うわ」

「ッ!!」

彼女が言ったことが頭を駆け巡った。葉山との行為をたった一回で終えたために、彼女は今完全に出来上がった身体を持って余しているのだ。

その言葉は先程の音声が作り物ではなかったことの何よりの証明である。そう考えると俺の一物はさらに膨れ上がった。そして俺は彼女に馬乗りのまま服を脱ぎ捨てた。

「すまん。もう挿れたい」

「……わかったわ。」

彼女はそう言い、仰向けで俺に向かって手を広げ、俺を迎え入れるポーズを取り、不敵に笑った。

「葉山くんに準備万端にされた私をかわいがってね」

「ああああああ!!!」

こいつ……俺のツボを理解してきている……!

俺は無我夢中でセーターを脱がせる時間すら惜しみ、彼女のパンツと下着を素早く脱がせ、正常位で挿入する体勢になった。

「比企谷くん……きて……」

ズプププ

「んあっ!!!」 ジュプジュプ

「雪ノ下!! 雪ノ下!!」 ズンズンズン

「お、大きい……ああ!んあ!」 ジュプジュプ

雪ノ下は喘ぎながら俺に抱きついてくる。そんな仕草にグツときながら俺は彼女を貫き続ける。

数分後……

「比企谷くんっ! ツんゆん! ああ……! イキそう!」 グチユグチユ

「俺もイキそうだ……」 ズンズン

「比企谷くんっ! 一緒にイキましよう!」 ジュプジュプ

「雪ノ下! 好きだ!」 ズンズンズン

「ツーン！私も！あああ……んああああッ！！！！」

俺と雪ノ下は同時に果てた。俺は彼女とつながったまま、雪ノ下の上に倒れこみ脱力する。そして俺の頭を愛おしそうに撫でる彼女。とても幸せな時間だった。

「最高だった……本能のままにやるのってこんなに気持ちよかったのか……」

今まではどこか理屈で考えながらセックスしていた。もしかしたらそれも良くなかったのかもしれない。

「そうね……今までで一番気持ちよかったわ……」

いわゆるトロ顔のまま雪ノ下もそう返してくれる。俺は彼女の答えがたまらなく嬉しかった。

「なあ……もう一回いいか？」

「まあ……まだおさまっていないものね。私としても齊かではないわ。でも避妊具は付け直さないと……」

「ああ。わかってる」

そうして俺達は延長戦に臨むのであった。



## 2 話

大学の試験が滞りなく終わった2月初旬、俺は大学初めての春休みを迎えていた。大学の春休みは約2ヶ月間とかなり長い。俺は試験が終わると同時にその期間、何をしようか考えていた。

大急ぎで雪ノ下宅へと帰り、出迎えてくれた雪ノ下を見るやいなや勢い良く土下座をする俺。

「え……何をしているの……？」

そんな俺に雪ノ下は困惑しながら問うてくる。

「さつき、俺の試験が終わったから、晴れて2人とも春休みだろ？」

「ええ。まあそうね」

「俺はこの休暇を有効に使いたいんだよ」

「はあ……。それとそれとてつもなく似合っているポーズ、何の関係があるのかしら？」

「雪ノ下さんにお願いがございます」

「……まあ言ってみなさい」

「また葉山に抱かれてほしいんだ」

「……………」

額を床に押し付けながら、俺は再び悪魔のプレイを申し出る。  
そんな俺の提案に沈黙を返す彼女。

おそろおそろ顔を上げるとその瞬間……

「はうー！」

俺の勃起した愚息一瞬で踏み抜かれた……………！

「あなたね……………EDは完治したはずでしょう？」フミフミ

そう言いながら何の遠慮もなく俺のを踏んでくる彼女。彼女は今膝下3cmくらいのワンピースを着ていたので、薄いピンク下着が目に入る。

確かに彼女の言うとおりで。前回のプレイの後病院に行くと、俺の病気は完治していた。

「…………それはそうなんだが、今度は別の病気に罹ってしまったんだ」

「それは何？」

下着への視線に気づいたのか、彼女は頬をポツと紅潮させ、俺から離れながら問う。

「寝取られフェチという重病だ」

「……………はあ」

そう言うとき彼女は自分の額に指をあてて、お決まりの、「頭が痛い」ポーズをしていた。

「確かにお前とのセックスはまったく問題ないレベルまで回復した。しかし、やはりこの前のプレイほどの興奮度はない」

「それにお前だって、あのプレイの時間が一番乱れていただろ？」

「……………」

そんな俺の無遠慮な言葉にキツと睨んでくる彼女。おこのんも可愛いな…………。

「あなた、私を本当に愛しているのよね？」

「もちろんだ。むしろ愛しているからこそやりたいまである」

俺は彼女の質問に即答する。

「まったく理解できないわ…………」

「ばっかお前、フェチつてのは理屈じゃないんだ。俺だって意味わかんねえよこんなの。お前だっていつか 一般的には良しとされない、そんなものに目覚めるかもしれないぞ」

「そんな日が来ることはないでしょうね」

俺の演説にヤレヤレといった感じで首を横に振りながら彼女は言う。

「とにかく！頼む！この通りだ！」

「まあ…………比企谷くんには何度も助けられているし…………仕方ないから付き合っただけま

しよう……」

雪ノ下はゴネまくって譲ろうとしない俺の態度に諦めがついたのか、目を閉じ困り顔で渋々と承諾した。

「ただし、今回はトランシーバーはなしよ。1人部屋で悶々としていなさい」

音声を聴くことができないのは残念だが、むしろ妄想を掻き立てられていいかも……と俺は考えながら歓喜の顔になるのだった。

そして俺は葉山に連絡をとり、葉山もそれを快く引き受けてくれた。

1、決行日は五日後の20時から23時までの3時間。

2、場所は雪ノ下宅近くのラブホテル。

3、トランシーバー等行為を観測するものはなし。

4、行為終了後雪ノ下から連絡する。

以上の4つが今回の条件となった。

そして貸出しプレイの当日となった。俺は家からラブホテルへ向かう葉山と雪ノ下を見送っていた。

「雪ノ下」

「ん……」

俺が名を呼びながら頭を撫でると、彼女は気持ちよさそうに目を細めた。本当に猫み

たいで可愛いなこいつ。

「じゃあ比企谷、行つてくるよ」

イチヤつく俺たちを遮り葉山は言う。

「ああ」

そして2人は家を出て行くのだった……。

それから30分、俺は悶々とした時間を過ごしていた。

前回、葉山がいくまでのたった1回という条件で、雪ノ下の身体は完全に出来上がってしまっていた。

今回は3時間と時間制限はあるが、回数の制限はない。体力の続く限り2人は交わり続けることになる……。

この条件の下で、雪ノ下はどんな顔で葉山に抱かれるのだろうか。俺にしか見せない顔？あるいは俺すら知らない顔……？そんなことを考えていると嫉妬で気が狂いそうになる。

しかし俺のモノは前回のプレイのときのように最大限まで膨らんでいた。全く触っていないのに、先走りの汗が溢れてくるのがわかる……。

リビングのソファに座りそんなことを考えていたとき、突然LINEの通知を知らせる音が静かな部屋に響いた。

「!?!?」

「始まるのか……?」

俺の介在がない、正真正銘の2人だけのセックスがついに始まるのかと思い、俺はおそろおそろメッセージを見た。

「……………」

「ラブホテルの受付が終わったわ」

彼女からの通知はホテルの受付を終えたという簡素なものだった。

今からまさにセックスを始めるのか思っていた。そんな所に来た受付が終わったという彼女の律儀な報告に、俺は早鐘を打つ心臓を鎮めるのだった……。

ラブホテルの店員には2人はどのように見えるのだろうか。おそらくお似合いの美男美女と言った所だろうな……。

「部屋に着いたわ」

それから少しLINEで彼女とやり取りをしていた。

しかし……

いきなりメッセージが返ってこなくなった。「雪ノ下?」「大丈夫か?」などと何度かメッセージを送るが、まったく彼女からの返答はない。

つ、ついにセックスを始めてしまったのか……?」

俺は焦燥感にくれながらぱったりと連絡が来なくなったスマホを見つめていた……。

それからの1時間、彼氏への連絡をなおざりにして、他の男とのセックスに没頭する

彼女を想像し興奮していた。

彼女は今、どんな体位で葉山のペニスに貫かれているのだろうか……。

正常位、バック、騎乗位、座位、ありとあらゆる体位を試す時間が2人にはあるのだ……。

俺はもう我慢できなくなって彼女に電話をかけた。

プルルルルプルルルルプルルルルプルルルルプルルルル

「比企谷くん？」

かなりのコール数が鳴った後であつたが、彼女は電話に出てくれた。

「ゆっ……雪ノ下……」

「何？」

「いや……その……もうやってるんだよな？」

「いいえ？まだしてないわ」

!?

雪ノ下は少し上擦った声でそう言った。最後の連絡からしばらく時間が経っている……。ラブホテルの密室に男女2人がいてまだ何もしていないなんてことがあるのだろうか……。

「ふー。気持ちよかった。始めようか。雪乃ちゃん」



「……………」

扉の開く音と共に葉山の声が聴こえてくる。葉山は一体どこへ行っていたんだ……。気持ちよかったという言葉からシャワーでも浴びていたのだろうか。

葉山がシャワーを浴びていたとすると、本当にいままでやっていなかったのか？

雪ノ下は葉山を嫌っている。

2人で申し合わせて貸出しプレイの時間を潰そうとしているのか……？

それとも……………？

「では始めるから切るわ」

そんなことを1人で考えて沈黙していると、彼女からそう切り出してきた。

俺はこんなプレイを提案しておきながら、葉山とセックスしていないでほしいという自分でも理解不能な感情に頭を支配されていた。

「ではまた」

雪ノ下は言葉通りに葉山と交わるつもりなのか、交わることなくこの場を流すつもりなのかあるいはもう既に交わってしまった後なのか、ということに考えを巡らせて沈黙していると、彼女はそう短く告げ電話を切ってしまった……。

俺が電話をテーブルに置き、放心していた。数秒後、ハツとして時計を見る。プレイ終了まであと1時間もある……。

永遠とも思える時間の中で俺は奥歯をカチカチと鳴らしながら興奮していた。そしてプレイ終了時間の23時となった。俺はやっとこの地獄のような時間が終わると思いい、深く安堵していた。

しかし……………

23時15分を過ぎてもまったく雪ノ下からの連絡はなかった。何度かメッセージを送るも、レスポンスはない……………。

23時30分を過ぎても連絡がこないことに心配になった俺は彼女に電話をかけた……………。

しかし電話がつかない……………。

「何をやっているんだ……雪ノ下……」

俺はとてつもない絶望に打ちひしがれていた。彼女は俺との約束を破つたのだ……。ラブホテルに乗り込もうとすら考えた。しかしホテルの場所はわかつて、何号室かまではわからない……。俺はただただ待つことしかできなかった……。

そして0時を回ったとき……

突然LINEの通知音がする。おそろおそろメッセージを見るとやはり雪ノ下からだった。

「ごめんなさい。行為を終えた後2人とも眠ってしまったの」

「今からすぐに帰ります」

鈍器で後頭部を殴られたかのような衝撃が走る……。恋人のように行為の後の余韻を愉しみ、そのまま2人仲良く睡眠を摂っていたというのか……

これは本当なのだろうか……？

そしてまもなくガチャリという音と共に雪ノ下が帰ってきた。俺は雪ノ下を出迎え

に行く。

「雪ノ下……」

俺は1年ぶりに再会したかのような気分になりながら彼女に声をかける。

「遅くなつて本当にごめんなさい。でも本当に寝てしまつただけなの……」

自分の身体を抱きながら目を伏せ、本当に申し訳なさそうにそう言う彼女。

俺はそんな彼女を信じることにした……。

「あ……ああ……大丈夫だ……」

「ごめんなさい。もう疲れてしまつていて……」

「ああ……そうだな。もう寝ることにしよう」

彼女の体力はかなり低い。

しかし、ここまで疲弊した彼女を見るのは初めてだった。

まさか俺の電話に出たとき以外ノンストップで抱かれていたのでは……。

俺はそんなことを思いつつ、ふらふらと足元の覚束ない彼女を支え、寝室へと向かうのであった。

そして翌日、まどろみの中から覚醒すると、雪ノ下が俺の肩を揺らしていた。どうやら起こしてくれたらしい。髪の毛の乾ききっていない様子を見るに、朝起きてシャワーを浴びていたのだろう。

「雪ノ下、体調は大丈夫なのか？」

「ええ。問題ないわ」

俺はゆっくりと体を起こしながら彼女に向き直る。彼女は体力はないが、回復力は凄まじい。一晩寝て昨夜の疲労は嘘のように消えていた。

「そつ、それで昨日何があったんだ!？」

体力が回復していた彼女に安堵した俺は昨夜のことを身を乗り出し尋ねる。

「そんなにハアハア息を荒げないでちょうだい。盛った犬のようになってるわよ」

「雪ノ下あ……」

「そんなに物欲しそうな顔をして……ちよつと可愛いじゃない……」

「んん、では質問をしてちょうだい。すべて答えるから」

彼女は咳払いをひとつすると、俺に質問をするよう促した。どうやらQアンドA方式で昨夜のことを報告してくれるらしい。

「なんで俺との連絡が途絶えたんだ？」

「シャワーを浴びていたのよ。すぐ上がるつもりだったのだけれど……その……葉山く

んが浴室に入ってきてしまつて……」

「なんだと……!?!」

「それで抵抗の間もなく前からお尻を鷲掴みにされてしまつて……」

雪ノ下の形の良い尻を鷲掴みだと!!!

「その後シャワーを性器に当てられながら、陰核をいじられたの」

「それで一瞬で濡れてしまつたわ」

彼女は恥ずかしげもなく奴との情事を俺に報告する。もしかすると彼女は昨夜の長時間セックスの影響で、葉山の色に染められ始めているのかもしれない……。

「お前……1回目は葉山では感じないと高らかに宣言していたじゃないか……」

「そうね……でも頭で抗おうとしても無理なのよ。彼、上手だし」

「くっ」

彼女は奴の技量を素直に認める。そしてそれはおそらく正当な評価だろう。彼女はどこまでも正直者なのである。

「彼は逃げようとする私の行く手を阻み、私を壁の方へ追い込んだ……そして私の背中が壁に当たると同時に片足を持ち上げられて一気にペニスを挿入されたわ」

「激しいピストンで膣内を引っ掻き回されて、頭がおかしくなりそうだった……そして

1回目の絶頂を迎えたの」

彼女はさも当然のように「一回目の絶頂」と言った。やはり昨夜彼女は何度も何度もイカされていたのか……………」。

「そして間もなく彼も私の中で絶頂していた……………」そして私が絶頂の余韻で頭がドドロロになっているとき、彼はマットを準備し始めたの」

「マット!? そんなことまでやったのか!?!」

「ええ。彼はマットの上に私を仰向けで寝かせ、肩、手、脇、胸、くびれ、太ももを順番に、身体のラインを確かめるようにじつくりと、ローションを塗りたくって言ったわ」  
「うう……………」

俺は彼女の話に呻き声を上げ、下半身を気にして視線を下に向ける。

「あら。限界みたいね。いいわ。あなたのモノをだしなさい。手でしながら話してあげる」

「すまん……………」頼む」

俺はベッドの端に座り直し、ペニスを露出させる。

彼女はベッドから降り、俺の足元へと座った。

そして俺のペニスを慈しむようにそつと撫でる。

その仕草だけでいきそうになるがなんとかこらえる。

「このプレイのときのあなたは本当に大きいわね」

「は、葉山のより大きいか?」

俺はたまらずそう問いかける。

「さあ?どうかしらね?」

「うわあああ」

俺の自尊心を得ようとした間に彼女はフツと笑って受け流し、シコシコと俺のをしごく。

「雪ノ下!!もう出る!!」

「無様にイキなさい。比企谷くん♥」

「うっ」

俺は雪ノ下の手淫で果て、噴出した精液が彼女のパジャマを汚す。

「まったく……:だけ出すのよ」

彼女はパジャマについた俺の精液のにおいをスンスンと嗅ぐ。

「雪ノ下!話の続きを頼む!」

「そうね。どこまで話したかしら。」

俺の懇願に、彼女は己の手を頬に当てとぼける。

「お前が……:葉山に全身ローションマッサージュを受けた所までだ!」

俺はプルプルと震えながらそう言った。



「ああ。そうね。その後彼は私をマットの上からどかして自身が仰向けになった。そして彼は身体に私の身体をこすりつけるよう言ったの」

才色兼備な彼女にさながら風俗嬢のようなプレイを要求するとは……。葉山の野郎……。

「私はすごく戸惑ったわ。どうすればいいか分からなかったもの。でも真っ直ぐに私を見つめる彼の視線に絡め取られて……。身体が勝手に彼の方へ吸い込まれていったの……」

あの雪ノ下が完全に手玉にとられ、「奉仕」する立場へと誘われた……。

「そして彼の上に跨って、上半身を倒して彼に身体を預けたの。そして私の身体を優しく抱いてくれて……。私は嬉しくなって身体を必死に前後に擦った……」

「き、気持ち良かったか……?」

「全身が溶けたかと思うくらい気持ちよかったわ」

彼女の頬が赤く染まり、うっとりとした表情になる。

「それで私……。我慢できなくて、上半身を起こして一回彼のペニスに私の性器を擦りつけてしまったの……」

葉山との行為の快楽に屈服した彼女の姿……。

「ハッと気づいたときには遅かったわ……。彼にその仕草を見られて……。身体をずらされ

て一瞬で挿入されてしまった……」

彼女は快楽に流された自分を恥ずかしく思っているのか、少し目線を下げて言った。彼女の言葉に俺はひっかかる。おいおいおいおい……。

「一瞬で？ 避妊具はちゃんとつけたのか？」

「ツ!!!」

彼女は俺の疑問に驚いたのか、声にならない声が出た。

「と、当然でしょう。今のは私に対する最大の侮辱よ。いくら快楽に流されたからと言って、私が避妊もせずには彼氏でもない男と性交する訳ないじゃない。あなたは私を信じてこのプレイをしているのでしょ。それならば私を疑うなんてもつての外でしょ？ あらうことか揚げ足を取って生で葉山くんと行為に及んだと言うなんて……だいたいあなたとも生でなんてしたことがないのだし……」

雪ノ下は明らかに動揺して早口でそうまくし立てた。

「……………生でやったんだな？」

俺は長い沈黙の後、一言彼女に詰問する。

「う……………その……………」

彼女はあわあわと両手をせわしなく動かした。

「ご、ごめんなさい……」

か、確定だ……。

俺は雪ノ下の初めての生セックスを葉山に奪われたのだ……。

俺はその事実には絶望しつつも確かな興奮を覚えていた。

「それで？」

「え？」

「その後はどうしたんだ？」

雪ノ下は俺の質問を怪訝に思ったのか、こちらを伺うような視線を送ってくる。

「葉山と生で繋がったあとどうなったんだ？」

「その……騎乗位で……」  
「……………」

「そのまま続行してしまっただわ……」

俺は昇天しそうな衝撃を受けるのを感じた。そしてそれは確かに性的興奮へと変わる……。

「行為中は気付かなかったのよ……。それで……葉山くんに下から何度も突き上げられて……何度も何度も絶頂していたわ……」

「気持ちよかったか？」

「え……ええ。彼が絶頂するまで、3、4回は私も絶頂したかしら……」

俺が想像するのは葉山に生で貫かれながら、恍惚とした表情で浅ましく腰をくねらせる彼女。

俺は背筋にゾクゾクという快感を感じながら問うのをやめられない。

そして決定的な質問をする。

「葉山はどこに出したんだ？」

「……………」

「中にだしたのか？」

「……………」

雪ノ下は俺の問いかけにビクツと反応する。

「葉山くんもその、いつも以上に興奮してしまつて……私たちが我に返つたときに

は私の膣から彼の精液が漏れ出ていたわ……」

雪ノ下は初めての生セックスだけでなく、初めての中出しまで奴に許していた……。ブリュットと逆流してくるほど、精液を膣内に注がれる彼女。奴の精子が雪ノ下雪乃を妊娠させようと彼女の中を泳ぎまわる……。

そこまで想像した時点で、興奮のあまり俺の意識はそこで途切れるのだった……。

## 3 話

「……」

「どう？・気持ちいい？」

翌日、俺達は2人で一緒に風呂に入っていた。そして何故か俺は今雪ノ下に頭を洗われている。

「まあ、気持ちいいのは気持ちいいけどな……」

雪ノ下は全裸で俺の頭を泡立てている。俺は股間にタオルを1枚かけているだけだ。ふと目を開けると、鏡に映った雪ノ下の乳首がチラチラと目に入る。瞬間、息子がムクムクと元気になった。

「胸、少し大きくなっただんじやないか？」

雪ノ下の魅惑のおっぱい（通称：ゆきぱい）が目に入り、違和感を覚えたので率直に聞いてみる。

前に比べたらやはり大きくなっていると思う。

今は掌に収まりそうなほどには大きい……と思う。

「そうかしら……確かに少し下着はきつくなっただけれど」

俺が鏡越しに胸を凝視しているのに気づいても、雪ノ下は特に気にせず返答してくる。付き合いたての頃は奥ゆかしい雪ノ下は恥ずかしがり、胸を見せてくれなかった。

「サイズ、ちゃんと変えた方がいいんじゃないか？」

「ええ、そうするわ」

「比企谷くんは大きい方が好き？」

雪ノ下は俺の顔を覗き込むようにして、少し不安そうに訊いてくる。

「俺は雪ノ下のならどんな大きさでも好きだぞ」

「……馬鹿ね」

雪ノ下は呆れたように言っただけで俺の顔を洗う動作を激しくした。しかし、雪ノ下検定1級を持っていて俺の分析では、今の声色には間違いなく嬉しいという感情も含まれていない！

「ちよつ、痛い！目に、目にシャンプー入ってるから！」

「あなたがいつまでも私の身体を視姦しているのが悪いのよ。ちゃんと目をつぶってな

きゃー」

「終わったわ」

「ぶっ」



唐突にお湯をぶっかけられた。

「……いきなりお湯をかけられてびっくりした。損害賠償を請求する。雪ノ下の身体を洗わせろ」

「ひどい因縁のつけかたね……。まあいいけれど……」

雪ノ下は無防備に俺を背を向けて、風呂の椅子に座る。俺は石鹸を手につけて雪ノ下の後ろで手をワキワキとさせる。

「比企谷くん、全部見えているのだけど……」

「おっと、すまんすまん」

鏡に映っていたか。俺としたことが迂闊だった。雪ノ下の肩に手を置いて、雪ノ下の身体を洗い始める。

「んっ……て、手で洗うのね……」

「……」

割れ物を扱うようにそつと肩に触れると雪ノ下は吐息を漏らす。そのまま手を滑らせていき、脇を入念に洗う。まったく性的ではないはずなのに、雪ノ下の妙にいやらしくみえるこの脇……！

「あっ」

「……」

脇をゆつくりと愛撫するように洗っていたら手が滑って胸を触ってしまった。てへぺろ。雪ノ下は鏡越しに睨んでいる。超怖い……。

「いや……これはあくまで事故なんですよ?」

「それなら早く手を離したら?」

俺と雪ノ下は身体を洗う距離ではない程に密着している。

1揉み。そして2揉み。俺はゆきぱいを揉み倒す。

「……」

「お、お嬢ちゃん、おじさんと気持ちいいことしないかい……?」

「比企谷くんがそのセリフを言うと、リアリティがあるわね……。十年後に捕まっていないことを祈っているわ」

まあ!なんと失礼な娘でしょう……!これはお仕置が必要ですね……。

「……ちよつと比企谷くん、背中に何か当たっているのだけれど……」

「……今日は後ろからいいか?」

「……はあ、いいわよ。はい」

俺の願いに応え、雪ノ下は躊躇いなく四つん這いになった。雪ノ下が恥ずかしがったので、バックなんて貸出しプレイ以前はほとんどやったことがなかったのに……もはや雪ノ下はそのポーズをとることを恥ずかしがってすらいない……。

「んんっ……」

すぐに入れたのに、雪ノ下の体内は随分滑りが良かった……。

「雪ノ下、随分濡れてるな。葉山とのソーププレイを思い出したのか？」

「ちが……うわよ……。え、比企谷くん、避妊具はちゃんとつけた？」

「……ああ、つけたぞ」

「んっ！嘘でしょ？そんな時間、あっ……ちよっ」

「まあまあ」

「まつ、だめ、子供が、できちやうから……あっ♡」

そのまま、俺たちは欲望の赴くままに、疲れるまでセックスした……。

「はい？今度は目の前で？」

「おう」

「比企谷くん、どんどん要求がエスカレートしているような気がするのだけれど……」

「だってお前らばかりで楽しんでくれるいじゃねえか。この前は連絡が途絶えるほど

しつぽりやりやがって」

「わ、私は別に楽しんでなんて……」

「夢中になって初生セックスに中出しまで許したくせに！」

「も、元はといえばあなたがこんな性癖に目覚めるのが悪いんじゃない……」

雪ノ下は困りきった顔でこめかみに手を当てながら言う。しかしこんな所で折れる訳にはいかない。もう一度あの快感を味わいたい！俺はその一心で雪ノ下と交渉する。「でも気持よかつたんだろ？」

「それは……確かにこれまで感じたことのない程の快樂ではあつたけれど……」

「じゃあいいじゃねえか。俺もお前が他人とセックスすると嬉しいし、お前も気持ちいい。ウィンウィンってやつだ」

「あのね……私が葉山君に乗りかえるかもしれないのよ？それでもいいのかしら？」

「俺はお前を信頼してるからな。これくらいどうってことない」

「はあ……その謎の自信はどこからくるのかしら……」

雪ノ下は諦めたようにそう言った。どうやら許可が得られたようだ。俺は小さくガッツポーズをする。

「はあ……何故こんな男に惚れてしまったのかしら……」

「比企谷、君は本当に変態だな」

「そう褒めるなよ。照れるだろ」

「褒めたつもりはないんだが……」

決行日、葉山が雪ノ下の家の寝室に到着していた。雪ノ下は今シャワーを浴びている最中だ。

「比企谷。雪ノ下さんを俺に取られても文句言うなよ?」

「そんなことはありえないから安心して雪ノ下を気持ちよくしてやってくれ」

「……」

「おまたせ」

シャワールームから出てきた雪ノ下がバスタオル1枚で部屋に入ってきた。

「じゃあよろしく頼む」

「はあ……。ごめんなさいね葉山君。よろしく頼むわ」

「別に構わないよ」

そう言った葉山は雪ノ下に近づいていく。そして雪ノ下の背中に手を回して彼女を抱きしめた。

「んっ……」

雪ノ下の艶のある唇から色っぽい吐息が漏れる。その唇を捕らえようと、葉山の顔が雪ノ下に近づいていく。雪ノ下は前は葉山のキスを拒んでいたが……。

「ん、ちゅ……」

雪ノ下は葉山のキスを拒まなかった。

「ちゅ、れろ、っん」

葉山は易々と自分の舌を侵入させ、彼女の口内を蹂躪している。いつのまにか身体を隠していたバスタオルは床に落ちており、雪ノ下は生まれたままの姿になってしまっている。

「雪ノ下……？キスはしないんじゃない？？」

「しゅる、じゅるる……そうだったかしら……？ちゅっ」

葉山は右手で雪ノ下の背中を支え、左手を彼女の後頭部に回し、角度を変えながら雪ノ下の唇を犯し尽くす。

「雪ノ下！」

俺の叫びを無視し、葉山は一度雪ノ下を解放し、ベッドに一気に押し倒した！葉山も素早く裸になったかと思うと、雪ノ下の上に覆いかぶさる。

「んちゅ、んっ、はぁ……」

そしてまた雪ノ下の口の中を犯し始めた。雪ノ下の熱っぽい声が聞こえてくる。

雪ノ下は葉山の引き締まった背中に手を回し、奴のキスをしっかりと受け入れている。

「んん……ちゅば……」

「ふう……こんなもんか……」

唇を離れた2人の口から銀の糸が伸びる。

「いやっ……当てないで……」

何だと思つて椅子から立つて覗きこんでみると、雪ノ下の腹に膨張した葉山の一物が押し当てられていた。

「前はこれによがり狂つていたじゃないか。そんなに嫌がることもないだろう？」

「い……言わないで……」

葉山の肉棒に屈服させられた雪ノ下をこれから見ることができるのか……。ゴクリと生唾を飲む音が聞こえてくる。

「ま、もう少し濡らしてからじゃないとね」

「あっ……」

葉山はそう言つて雪ノ下の股間に頭を埋めた。そして彼女の陰部に舌を這わせ始める。

「あ……んっ……んんっ……！」

葉山が雪ノ下のクリトリスを丹念に舐めたり、舌で中を攻めているとたちまち水音が聞こえてきた。

「やあ……んっ……はあ！」クチュクチュ

「さてと……」

雪ノ下の身体が出来上がったのを確認して、葉山が彼女の両足を持って挿入の体勢をとる。今回はちゃんと避妊具を付けてくれているようだ。

「葉山君、ゆっくり……」

「……」ズブツ

雪ノ下の懇願を聞かず、葉山は勢いをつけて一気に彼女を貫いた。

「かつ……はあ……んんん！」ズツポズツポ

「ごめんごめん。我慢できなかつたよ」ギシッ

「ああつーだめ……！」ズツポズツポ

ただ快楽を貪るような激しい腰使いにもかかわらず、雪ノ下はあつという間に甘い声で喘ぎ始めた。

「あんっーやつ……」ヌツチュヌツチュ

普段は凛として美しい雪ノ下が、嫌っているはずの葉山のピストンに蕩けている。その事実は俺をたまらなく興奮させる。

「いやあ……比企谷くんっ、あん……みないで……」ヌツチュヌツチュ

雪ノ下は葉山のピストンをその身に受けながら、首だけ俺の方に傾けてそう懇願する。

「雪ノ下、綺麗だ」



「ああん！比企谷くん！」ズチユズチユ  
 雪ノ下は切なそうに俺の名を呼んだ。

「今は俺とのセックスに集中してほしいな」パンパンパン

葉山はそう言つて身体を前に倒した。そして雪ノ下の唇を一瞬で奪う。

「ああ……ああ、ん、んちゅ、んっはあ、だめ……」ヌリユヌリユ

ただそれだけで、雪ノ下は俺の存在を忘れたように眼を閉じてキスに没頭し始める。彼女の両手は葉山の引き締まった背中に回された。2人が相思相愛のカップルのように錯覚する。

「しゅる、あッ！あん、れろ」ヌリユヌリユ

「……」パンパンパンパンパン

「あっ！はげしつ……だめっ、ちゅっ、だめ、くるっ」ヌツチユヌツチユ

葉山は雪ノ下の舌を犯しながらピストンのスピードを速める。

「はっ、すごっ……あむ、ん！ん！ん！ん！ん！ん！ん！ん！ん！ん！ん！ん！」ビクッビクッ

雪ノ下の身体がビクビクと震え、彼女が絶頂に達したこと分かった。

「ふう……」

葉山は一息ついた様子で、雪ノ下から離れた。そして未だ肩で息をしている雪ノ下の身体の下に手を差し込んで、うまい具合に雪ノ下をうつ伏せの体勢にさせた。

「あつ……」

うつ伏せになって雪ノ下の形の良い尻が葉山の前にさしだされる。葉山はその尻を両手で鷲掴みにし、左右に肉をぐにと広げた。

「いや……まだ……」

「まだ俺はイってないからな」

「はあん！だめえっ！」ズポン

寝バックの体勢で葉山に犯される雪ノ下。その姿はやはり俺の知っているものと一致しない。

「こ、こわれちゃう……ああん！」グツポグツポ

雪ノ下は猫の交尾のようなセツクスにひたすら乱れている。眼を気持ちよさそうに閉じ、口は半開きになっている。快楽に耐えるためか、枕をギュツと抱きしめていた。

「雪乃ちゃんはこの体位が好きだからな。比企谷も試してみるといい」ズンズン

「あんつ、あつ、だめ、あつ、あんつ」グツチヨグツチヨ

葉山の言うように、雪ノ下はこれまでに見たことがないくらいよがり狂っている。しかし他人から彼女の好きな体位を教えられるというのは……。

「あつあつやん、そこ、いいの、いやっあん」ヌツチユヌツチユ

「そろそろイクぞ！雪乃ちゃんも一緒に！」パンパンパン

葉山はより征服感を出すためか、上体を前に倒し、雪ノ下の身体に密着するようにのしかかった。

雪ノ下の肩の辺りに葉山の顔がくっついていて、葉山はその状態のまま、雪ノ下の口の中に自分の指を2本程差し込んだ。

「んっ、ちゅぶ、んんんんッ!!!」ピクンピクン

「うっ」ドクツドクツ

雪ノ下は最後に口に入れられた葉山の指を舐め、エクスタシーを迎えた。

葉山は腰を震わせて達した後、雪ノ下に体重をかけ過ぎないように注意しながら余韻に浸っている。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

雪ノ下も心地いい運動をしたかのように、顔をうっとりさせながら同じように余韻に浸っていた。

俺はというと、2人の最適解のようなセックスを見せられて、ギンギンにモノを滾らせていた。

「雪ノ下、ちよつとこっちにきてしやぶつてくれないか」

「……はぁ。分かったわ」

雪ノ下は葉山の下から這い出てるようにして、こっちにくる。

「待ってくれ。まだ俺は足りないぞ」

葉山が雪ノ下を引き止めるように言う。

「ごめんなさい。比企谷くんに苦しい思いをさせる訳にはいかないの。また今度しましょう」

雪ノ下は俺の方にゆっくりと歩いてきながら葉山の方を向かずに言う。

「待て。勝手にされるのは困る」

「はあ。どうせまだこのプレイをさせるんでしょう？そういう意味よ」

俺の抗議に呆れたように言つて、椅子に座っている俺の側に跪き、竿を何度か撫でてから、フェラチオを始めた。

「しゆる、じゆるる、じゅぼ」 チュパチュパ

「そうか。分かったよ……」

葉山は諦めたようにそう言つた後、服を着て去つていった。アイツ、雪ノ下を取られなくても文句を言うなとか言つてたな。

アイツ視点では雪ノ下を俺に寝取られたようにみえているのかもしれない。アイツも寝取られに目覚めればいいんじゃないか？（適当）

「ちゅ、どう？気持ちいい？」 グポグポ

雪ノ下が上目遣いで問いかけてくる。この子は男たらしの天賦の才を持っているな。

「ああ。こんなところで覚えたんだ？」

俺が快楽に耐えながら何とか言語を口にする。

「ふふ……。葉山くんに教わったのよ。じゅぷ」ジユツポ

そう言つて雪ノ下は蠱惑的に微笑む。これはあれだな。『魔性の雪ノ下』の誕生だな。

「うっ、イキそうだ……」

「あら、はやいのね……。しゆる、まあ、いいわ」チュ、チュ、チュク

「くっ……。飲んでくれ」ドクンドクン

「んっ……。」ゴクゴク

雪ノ下は俺の要求通りに喉を鳴らしながら精液を飲み干した。

「精液つてうまいのか」

「何というか、こつてり？」

「よく分からんな……」

「気になるなら自分のを飲んでみれば？」

雪ノ下が真面目な顔でそんなありえないことを言ってきた。

「絶対嫌だわ、汚いだろ」

「あなたね……。私に飲ませておいて……」

「雪ノ下の体液ならいくらでも飲んでやるぞ」

「き、気持ち悪い……」

「ええー、そこドン引きするところ？」

「普通するでしょう……」

雪ノ下はそう言つてまた頭痛を抑えているようなポーズをした。

## 4話

「こんにちは」

「よう」

葉山と雪ノ下の情事を目の前で見た翌日、雪ノ下の家を訪れていた。大学は春休みで、俺も雪ノ下もバイトもサークルもしていないため、気分はすっかりフリーダムである。

リビングに通され、テーブルと座ると同時に、俺は次の貸し出しプラン雪ノ下に提示する。

「……」

テーブルの上に資料を広げていく俺を、雪ノ下は紅茶を注ぎながらまた始まったか……と諦めた眼で眺めている。

「次は葉山も呼んで、温泉旅行に行かないか？」

「2人で行くなら何も文句は無かったのだけれど……」

「葉山と2人で行きたかったのか!？」

「あなたは馬鹿なのかしら？」

俺のちょっとしたジョークに雪ノ下は凍てついた眼差しを向けてくる。

出会った当時の高校2年の時のような、全盛期の眼光だった。

「すまんすまん。それで雪ノ下。駄目か？」

超怖かったので素直に謝って話を前に進める。

「しまうわよ……………」

雪ノ下は弱々しい声でぼしよりと何かを言ったようだが、俺の耳には届いてこなかった。

「え？なんだったって？」

「だから……………これ以上葉山くんとの行為を続けたら、私はきつとダメになってしまうわ……………」

雪ノ下が恥ずかしそうに視線を逸らしながら言う。ああ、この雪ノ下の様子だけでご飯3杯はいける自信がある。

「そんなに葉山とのセックスはよかったのか？」

「え、ええ…………。葉山くんへの嫌悪感が消えるくらいには……………」

あの雪ノ下の理性が吹っ飛ぶくらいの快楽ということか。そりやすげえな。それほど葉山の技術は高いのか。それとも雪ノ下と葉山の身体の相性が抜群にいいのか？

「今のを聞いてもつと葉山と懇ろになってほしくなったぞ」



「……」

俺の高らかな宣言に雪ノ下はしまったという表情をする。

「そもそも葉山くんは来られるの?」

「葉山なら2つ返事でOKしてきたぞ」

「……どうして彼はこんな話に乗ってくるのかしら」

雪ノ下は本当に理解ができないとでも言うように、首を傾げている。可愛い。

「まあ、お前のことが好きなんだろうな」

「それはないと思うけれど……」

「そうか?この前お前がシャワー浴びてたとき、雪ノ下を取られても文句言うなとか言ってたぞ」

「……どうしていまさら……」

雪ノ下は目線を下げて陰鬱な表情を作る。

「引き裂かれた2人の仲を取り持った俺を褒めてくれ」

「方法が斜め下にも程があるのだけけれど……」

雪ノ下は心底呆れた様子で、いつものようにこめかみに手を当てている。

「それで、いつ出発するの?」

「1週間後だ。なんだ雪ノ下、乗り気になったのか?」

「行かないと言って比企谷くんに泣かれても困るもの」

「いや……別に泣きはしないけど……」

たぶん。

「そろそろ出かける？」

「ん？ああ、そういえば今日はデートだったな」

「あなたね……。今のは愛想を尽かしても仕方のない発言よ」

「でもお前はこんなことで今更俺の評価を変えないだろ？」

「……確かにそうね」

俺達2人は揃って雪ノ下のマンションのロビーから出る。春休みといってもまだ2月の初旬だ。俺は黒のコート、雪ノ下はベージュのコートを羽織っている。

「さぶ……」

冬の風に煽られて手が冷たかったからコートのポケットに手を突っ込む。

「比企谷くん、ちよつと手を出してみて」

「え？寒いんだけど……」

「いいから」

雪ノ下に言われた通りにコートから手を出す。

「こうすれば冷たくないでしょう?」

雪ノ下はぶらんと脱力した俺の手を、自分の手で包み込み、いわゆる恋人繋ぎで手を繋いだ。これが世に言う俺の彼女がこんなに可愛い訳がない状態である。妹が可愛いのはわざわざ言うまでもない。

「確かに温かいな」

「じゃあ行きましようか」

街に繰り出して、色々と見て回ったり、映画鑑賞をしたりしていると、あつという間に辺りが暗くなっていた。

「そろそろ帰るか?」

「ええ、そうね」

雪ノ下と一緒にいると本当に時間が経つのが早い。手を繋いで雪ノ下の家へと向かう。

「……」

公園の近くの歩道を通ろうとしたとき、雪ノ下の足取りが突然重くなった。

「ん?どうかしたか?」

「ちよつと入ってみない?」

雪ノ下は空いている方の手で公園を指さした。

「何か珍しいな」

「何が？」

「お前がこんなにかツプルかツプルしてるところに入ろうとするとか、珍しいだろ」  
「たまにはいいじゃない。入ってみましょう」

雪ノ下は俺の手を引つ張つてズンズンと公園内へ進んでいく。やだ、俺の彼女が男らしすぎる。公園へ入ると案の定というか何というか、自分たちの世界へ入っているカツプルがちらほら見えた。

「ここにするわ」

雪ノ下は目ぼしいベンチが見つかったのか、繋いでいた手を離して一人で座る。そしてポンポンとベンチを軽く手のひらで叩いてそこに座るよう促してくる。俺はそれに誘われるように隣に座った。

「雪ノ下、平気なのか？」

「別に誰も見てないわよ」

「そうかもしれないが……」

何となく落ち着かない。俺は周りを伺うためにチラチラとあちこちに視線を走らせる。

「ん……」

雪ノ下から視線を外した時、不意に唇を彼女に奪われた。キスをするといつも思うのだが、彼女の唇は驚くほど柔らかい。他人と比べてもかなり柔らかいんじゃないだろうか。

まあ、雪ノ下としかキスしたことないんだが。

もちろん俺が小学生低学年の頃の小町はノーカン。感触とか覚えてないし。

雪ノ下は両手を俺の膝辺りに置いて、身を乗り出している。ピチャピチャと唇が触れ合うときの音が耳に届いてくる。雪ノ下は目をつぶって口付けに夢中になっている。俺も目をつぶってキスを返す。

「んっ、んっ」

キスの音に混じって漏れる雪ノ下の吐息がとてつもなく色っぽい。舌を使わない軽めのキスは久しぶりだ。

「もう気にならなくなつたでしょう？」

「ああ、そうだな」

見事に雪ノ下しか目に入らなくなつた。

「ん、ちゅ……」

今度は俺からキスを仕掛けた。

雪ノ下の腰に手を回して彼女の身体とさらに密着する。

すると雪ノ下も俺の首に両手を回してくれた。

「んっ！はあ……ちゅ、んっ！」

雪ノ下の口に舌を侵入させ、すぐさま舌を捕まえて離してやらない。

「じゅるるっ、ちゅぷ……れろっ……んっ！んっ！」

唾液を送り込みながら雪ノ下の歯を舌でなぞっていく。ゆっくりと品定めするように丹念に舐めあげて、雪ノ下の八重歯まで犯し尽くす。

「ちゅっ……れろ、れろ……あむっ……じゅるるっ、んあ……ぐくっ」

雪ノ下に唾液を注入し続けると、口内の許容量を越えてしまったらしい。俺と雪ノ下の唾液でドロドロに混じりあった液体を喉を鳴らして飲み込んだ。

「ん、ちゅぱっ、はあ……ちゅ、ちゅぷ……はあ……♡」

そこで雪ノ下を解放して唇と唇を離す。体勢はそのままなので密着度はとてもつもなく高い。

「……不意打ちとは卑怯ガヤくんらしいわね」

「先に不意打ちをしてきたのはお前だろ」

「キスの仕方も変態そのものね。どれだけ唾液を流しこめば気がすむのかしら」

「でも、興奮しただろ？口の中を犯されてる感じがして」

「まあ、あなたのキスはそこが売りだものね」

雪ノ下の言葉に違和感を覚える。そしてすぐにその違和感の正体に気づいた。

雪ノ下は葉山ともキスを交わしたことがあるのだ。

「は、葉山のキスはどんな感じなんだ？」

「葉山くん？彼のキスは……」

雪ノ下はそこで言葉を止め、少し思考をしているような素振りを見せる。

「……幸福感に包まれてから、前後不覚になるという感じかしら」

なんだそりや……。キスだけで女をそんな状態にすることが可能とは思えない。そんなオカルトありえませんか。つか普通逆じやないのか。

「ゆ、雪ノ下はどっちのキスが好きなんだ……？」

俺は股間を膨らませながら核心的な質問をする。さながら国会での議論のように、俺の脳内会議では純愛派と寝取られ派が白熱して闘っていた。

「そうね……。獣のように求められて唇を貪られるのも好きだし……。身体を多幸福感で包まれるのも好きだわ」

俺はゴクツと生唾を飲み込む。

「やっぱりどちらも甲乙つけがたいわ。引き分けね」

「……」

雪ノ下の答えに俺はガツクリと肩を落とす。

「そういえば、雪ノ下のファーストキスはいつだ？」

ふと気になったことを質問した。雪ノ下が初めて付き合ったのは俺だと言っていたからキスも俺が初めてだとは思うが。

「ファーストキス？」

「ああ、ちなみに俺は雪ノ下だ」

小町は家族なのでノーカンだ。つか家族を入れちゃうとファーストキスっていう概念が成立しないしな。兄妹じゃなくとも親に奪われたってことになる奴も多いんじゃないか。

「ふふ……。聞きたいの？」

雪ノ下は目を細め、口角を上げて妖艶な表情を作った。まさか……雪ノ下は……

雪ノ下は俺の首に手を回したまま、俺の耳に自分の口を近づけて。

「私のファーストキスの相手は葉山くんよ」



そんな爆弾発言を囁いた。ドクン!と俺の心臓の鼓動が強くなる。胸が早鐘を打って、息が苦しくなる。しかしそんな身体の状態とは裏腹に、俺の一物はさらに膨張していた。

雪ノ下と葉山は幼馴染だ。2人の過去に何があったのかは知らないが、一緒に過ごしているときに、いい感じの雰囲気になつていてもおかしくはない。最近の子供はかなりませているらしいし。

「幼稚園の時に、姉さんの策略で1回だけだけれど。まあ事故みたいなものとはいえ、ファーストキスには違いないわ」

雪ノ下さん……。何してくれてるんですか。まあ今の俺的には全然おいしいハプニングですけど。それにしても、葉山は3つも雪ノ下の初めてを搔つ攫つていたのか……。

「どうしてこんなに大きくしているの?」

雪ノ下は俺の股間を一目みて、ニヤリとしてからズボンの上から手を当てた。そのままゆつくりと弧を描くように擦ってくる。

「く……雪ノ下あ……」

「続きは私の家で……ね……」

またしても雪ノ下は顔を俺の耳の近くまで持ってきてきて囁いた。それやられるたびに

あふん！つてなるから出来ればやめて欲しい。

俺はレンタカーを運転し、高速を走らせていた。目的地は千葉県内の旅館だ。ちなみに運転免許は去年の夏休みに雪ノ下と2人で教習所に通って取った。

「あとどれくらいかかるの？」

助手席から雪ノ下の声が響く。

「次のサービスエリアで半分だ」

「意外と近いのね」

目的地までは2時間程で着く距離だ。旅行としては短い方だろう。スイーツ脳的に言うと、プチ旅行と行ったところだろうか。寝取らせプレイを兼ねたプチ旅行とは新しいジャンルだな。特許申請しとくか。

「じゃあそこで俺が運転をかわろうか」

「ああ、頼むわ」

後部座席で足を組んで座っている葉山が口を挟んできた。プレイのタイミングは葉山に任せてあるから、いつ始まるかというドキドキを楽しみながら運転している。本当は運転に集中しないとやばいのだが。何と言っても免許取って数えるくらいしか運転してないからな。今はちゃんと集中しよう。

「ふう……」

何とか事故を起こさずサービスイリアに駐車させた。

「お疲れ様。比企谷くん、一緒に出るでしょ？」

雪ノ下がカチャカチャと音を出してシートベルトを外しながら話しかけてきた。

「ああ。別々に行く理由もないしな」

「私達は一緒に行くけど、葉山くんはどうするの？」

今度は雪ノ下は後ろを向いて葉山に声をかけた。

「うーん……俺は別行動で」

「わかったわ」

少し考えるように唸った後、葉山は一人で先に出て行った。

「んんー」

車から出ると、雪ノ下が両手を挙げて伸びをしていた。俺も身体をリラックスさせながら彼女を見やる。雪ノ下の服装は上が黒のケーブルニットで下が青のジーパンだ。

やっぱり雪ノ下は何を着ても似合うな。

「意外と運転は問題なかったわね」

「そうだな。正直まだ余裕はなかったが」

休憩所に向かって2人で話しながら歩く。

「次は私が運転しましょうか」

「まあ、葉山でもどつちでもいいけどな」

雪ノ下の運転は俺より数段上だ。3日目にして教習所の教官に超褒められていた。

ただのナンパだったのかもしれないが。

つか雪ノ下と教官が車の中で2人きりってやばいな。

雪ノ下のスカートからはみ出た太ももをねつとり視姦されたり、触られたり。超捗るんだが。

あ、駄目だわ。雪ノ下は教習所行くときは必ずジーパンだった。彼女のガードが固くて恨めしい……。

「比企谷くんはお手洗いを済ませたら車に戻っていていいわよ。運転で疲れているでしょう。私がい出しをしてくるわ」

俺が常軌を逸した妄想に耽っていると、雪ノ下が俺を気遣って買い出しを申し出てきた。

「そうか？じゃあ頼むわ」

俺は何となく申し訳ない気持ちになりつつ、雪ノ下に買い出しを頼んで男性用トイレ

に入った。

「ふう……」

トイレで用を足した後、自販機で買ったマツカンを飲んで一服する。やっぱりうまいな。車に戻るか。一気飲みして空になった缶をゴミ箱に捨てて車へ向かう。

「……」

左腕につけた腕時計を確認する。俺が車に戻ってから既に25分が経っている。

「さすがに遅すぎるな……」

葉山も雪ノ下も戻ってきていない。携帯も繋がらない。何かあったのか……？俺は心配になり、後部座席のドアを開けて休憩所の方に目を凝らす。

「……ん？」

雪ノ下らしき人影がこちらに近づいてくる。しかし2人組だから違うだろう。

「はっ。」

今度は完璧に確認できた。こちらへ向かってきているのは間違いなく雪ノ下だ。しかし、何故かその隣に葉山がいた！

「雪ノ下、どうして葉山と一緒に……？」

2人が車の近くまでやってきたので、率直に疑問を投げかける。

「売店で彼と会ったから、一緒に戻ってきたのよ」

そのまま戻ってきたにしては遅すぎる気がするが……。

「ちよつと遅くなかったか？」

「そうかしら……」

そう言う雪ノ下の頬は心なしに赤く染まっている。何か怪しいな。後で雪ノ下に根掘り葉掘り質問してみるか。

雪ノ下は嘘をつかないが、本当のことを言わないことはある。これは俺の経験と、雪ノ下陽乃という魔王の証言から導き出した答えだ。つまり俺が質問を間違えなければ、俺は真実を知ることができる。

「比企谷、運転代わるぞ」

葉山は特に俺になにも言わず、運転の交代を申し出た。

「そ、そうか。すまん」

「気にするな」

葉山は口元に少し笑みを浮かべて、運転席に座った。雪ノ下もそれに続くように助手席に座る。

「雪ノ下？助手席に座るのか？」

「ええ、葉山くんの運転の補助をしようと思うのだけれど。駄目かしら」  
「いや……」

雪ノ下は論理的に助手席に座る理由を説明する。俺も先程まで運転の補助はしてもらったし、そう言われると、ぐうの音も出ない。しかし自分の彼女の他の男の運転する車の助手席に座るといいうのは何となく違和感がある。いや、寝取らせプレイにはありなんだが。

ようやく、という程でもないが目的地の旅館に到着した。時計を確認すると、高速を降りたところで、葉山が雪ノ下と運転を交代した。その時葉山は俺に気を使ったつもりなのか後部座席に座ってきた。隣に座るのは気持ち悪かったのですぐに助手席に移動した。

「雪ノ下さん、荷物持とうか？」

「どうぞお構い無く」

「そうか」

雪ノ下は葉山に冷たく言い放って旅行かばんを肩に自分で持った。貸出しプレイの時はあんなに仲が良さそうなのに絡み合っているんだが。今の雪ノ下の葉山への態度は高校の時のようにツンケンしている。

雪ノ下は葉山と交わると、奴への嫌悪感が消える程気持ち良いと言っていた。もしか

すると雪ノ下はそれに抗おうとプレイ以外の時はこれまでのように振る舞おうとしているのかもしれないな。

旅館の受付を済ませ、案内された部屋に入る。畳敷きのその部屋は中々の広さで、部屋の真ん中には大きめの座卓が設置されている。

「じゃあ俺はこっちな」

葉山は部屋の右に進んでいく。この部屋は通常なら壁がある場所に障子が設置されている。葉山がその障子を開けるとまた同じ広さくらいの部屋が現れた。主に2組で泊まりの客向けに提供している部屋らしい。

「葉山、始めるタイミングは任せるからな」

「ああ、わかってるよ」

爽やかに微笑んで葉山は障子の向こうに消えていった。

「さて、温泉に浸かりにいくか？」

「そうね。仲居さんが夕食まで少し時間があると言っていたし」

雪ノ下はテキパキと自分の鞆から、洗面用具を取り出した。

「さあ、行きましよう」

「おう」



「……」ゴクゴク

俺は温泉あがりに、喉を鳴らしながらマツカンを味わっていた。

旅館なのに自販機にマツカンを入れているとは、さすが千葉の旅館である。

雪ノ下はまだ温泉から出てきていない。混浴だったらなお良かったのだが、さすがにそんなにうまくはいかなかったな。

しばし雪ノ下と葉山が交尾するシチュに考えを巡らせていると、女湯の暖簾の向こうからぺたぺたとスリッパが床にぶつかる音が聴こえてきた。

「お待たせ、比企谷くん」

聞き慣れた声と共に、浴衣姿の雪ノ下が暖簾を潜ってきた。洗面用具の入った手提げ袋を腕にかけて、こちらへゆっくりと歩いてくる。髪型は高2の修学旅行の時のように、後ろ髪を上留めあげている。

「……」

この髪型を前に見た時と比べると、雪ノ下の容姿は少し大人びたと思う。

最近胸が少しだけ大きくなったようだし（鏡の前で小さくガッツポーズをする雪ノ下を見た時は悶え死ぬかと思った）

今、露出させているうなじからは高校生の時には微塵も感じなかった大人の色気の下

うなものも感じ取れる。

顔はほとんど変わっていないが、雪ノ下雪乃ならば良い年の重ね方をするのは間違いないだろう。

「どうしたの？」

「はっ」

いつのまにか雪ノ下が俺の目の前まで来ていて、ソファに座っている俺を覗き込むようにして伺っていた。

「すまん。少し見惚れてた」

「……付き合い始めてからの貴方は、あまりにも直球すぎると思うわ……」

雪ノ下が照れたように、真っ直ぐに俺を捕らえていた視線を外した。

「俺の雪ノ下への見惚れ歴は結構長いぞ。実は初対面の時から見惚れてたからな」

「う……」

俺の追撃に雪ノ下の顔がみるみるカッターと真っ赤に染まっていく。ご馳走様です。

雪ノ下が落ち着いてから部屋に戻ると座卓に食事の準備が完了していた。見ると葉山も座布団に座っており、どうやら待たせてしまっていたらしい。

「すまん。待ったか」

「ついさつき準備が終わったからね。そんなに待つてないよ」  
「そうか」

俺達の側には座布団が2つ並んでいたため、俺と雪ノ下はそれぞれそこに腰を下ろした。

「いただきます」

思い思いに食事開始の儀式を行ってから、料理に手をつけ始めた。

葉山は食事中に仕掛けてくることもなく、至って平和に終わった。意外だったのは葉山が食事を終えたらすぐに自分の部屋に引っ込んでしまったことだ。食事中も絶え間なくドキドキしていた俺としてはかなり拍子抜けしてしまった。

「葉山、こないな……」

「心変わりしたのかもしれないわね。だってやっぱりこんなプレイ異常なもの」

俺は座布団に座っている雪ノ下の肩を揉んでいた。俺の目の前に、いつもは見えない雪ノ下のうなじがあつて、吸い付きたいという欲望が頭を支配している。

「残念だ……」

「本当に残念そうな声を出すのね……」

「あ、そうだ。パーキングエリアで葉山と何かあったのか？」

「……………どうして?」

「いや、やけに遅かったから」

「……………そうね。計画が破綻した比企谷くんの落胆ぶりに免じて話してあげましょう」

「やっぱり何かあったのか!」

「普通に話しても面白くないから、ひとつゲームをしましょう」

「どんなゲームだ?」

「私と葉山くんの間に何があったのかを探る推理ゲームよ」

「なるほど……………」

「質問には事実で答えるわ。質問の数は……………5つ。同じような質問は禁止。ただし私は

質問への回答を2度拒否できる。真実に到達できたらあなたの勝ち」

「わかった」

なかなか面白そうなゲームで、なおかつ寝取らせプレイも兼ねている。そう考えると感情が昂ぶってくる。今現在、パーキングエリアで何があったのかは俺には分からない。俺の持っている情報は、雪ノ下が葉山と会ったのは売店ということ、雪ノ下がフリーになったのは俺と別れてからの約30分ということだけだ。

「……………」

雪ノ下の肩を揉みながら、しばし思索する。雪ノ下には2度回答拒否権がある。

慎重に質問しなければならない。と言っても、真実に5つの質問でたどり着くのは難しい。拒否権を使われたら実質3つだ。

ここは雪ノ下に早々に拒否権を消費させて、「何をしていたか」と質問する戦略で行こう。

「葉山とセックスしたのか？」

「いいえ」

「……」

ここは拒否権を使ってほかしてくるかと思ったが。少なくとも挿入はされていないと。次は質問を広くしてみるか。

「葉山と性的接触はしたか？」

「……拒否するわ」

やはりここは拒否か。あくまで可能性でしかないが。キス程度はやってそうだな……。

「葉山のペニスに奉仕したのか？」

「……したわ」

雪ノ下の答えを聞いた途端に心臓の速度が跳ね上がる。

まさかとは思ったがキス所の騒ぎじゃなかった。つかここを拒否しないということ

は俺の戦略は見破られていると考えていいだろう。

「イカされたか？」

「いいえ」

拒否権は残されたから、俺の負けか。断片的な情報は手に入ったが真実に到達したとは言えない。

「気持ちよかったか？」

「……ええ、気持ち良かったわ」

「ッ！」

「ふふ、私の勝ちね」

雪ノ下が勝利宣言と一緒に俺の方に振り向いた。

目の前でいたずらっぽく微笑む雪ノ下と、彼氏を車に放置して間男との行為に励む雪ノ下のギャップに我慢ができなくなった。

「んっ！」

雪ノ下の露出したうなじに吸い付いたまま、雪ノ下に抱きつく。力を加減しながら雪ノ下の華奢な身体をじっくりと味わう。雪ノ下のうなじにキスの痕ができたことを確認し、彼女の身体を回転させて、畳の上に仰向けに押し倒す。

「いいわ……き……き……」

雪ノ下は俺の首に両手を回して俺を誘ってきた。

雪ノ下の身体を入念に愛撫した後、正常位で1回だけ挿入して2人でほぼ同時に絶頂を迎えた。タイミングを見計らったかのように仲居さんが布団を敷きに来てくれたので、急いで服を着て対応した。

布団は2枚敷かれたので、別の布団に入って就寝することにした。葉山と一緒に布団に入っているところを見られるのが恥ずかしいらしい。

「おやすみ。雪ノ下」

「おやすみなさい、比企谷くん」

俺は電気を消してから、布団に入りなおした。雪ノ下は髪留めを外して、いつものような髪型に戻っていた。

「……」スースー

すぐに隣から規則正しい寝息が聴こえてきた。雪ノ下はもう眠ってしまったらしい。向こうの部屋の電気はまだ点いているが、結局葉山は障子の向こうから出てこなかった。

「……ふあ」

欠伸も出て、かなり瞼が重くなってきた……。

「ああん……」

雪ノ下、葉山の膝の上に抱えられる形で身体を貫かれている。

「いやあ……」

葉山が雪ノ下の胸全体を口に含んでいる。さらに舌で薄いピンク色の乳首を転がしているのか、口がモゴモゴと動いている。

「はあ……んん……あぁ……」

腰の動きを最小限にした、焦らすような葉山の攻めに、雪ノ下は奴の背中に手を回しながら悩ましげな声を出す。

「葉山くん……もつと……」

ついに雪ノ下は欲望を満たすために、拙い動きながらも腰を自ら振り始めてしまう。雪ノ下の乳首を吸ったり、舐めたりしながらそれを伺っていた葉山は、突然雪ノ下の唇を奪った！

「ちゅぷ、じゅる、ああん……んんん!!」

葉山は雪ノ下の口内を犯し始めると同時に、腰の動きを激しくする。

「ああ!!これ、ちゅ……す……いわ……」

雪ノ下は葉山のペニスによがりまくる。そして……



「好き、好き、んちゅ……隼人くん……もつと……」

雪ノ下が葉山の下の名前を呼び、奴のことを好きだと言った。雪ノ下がどうしようもなく遠くに行ってしまった気がする。俺は雪ノ下の名前を呼ぼうとするが、声が出なかった……。

平たく言うと、今のは夢だった。さっきの夢の場所は雪ノ下の家の寝室だったが、現在俺がいるのは旅館の布団の中である。雪ノ下には背を向けているが、人がいる気配を感じる。おそらく雪ノ下は今も隣の布団で寝ていることだろう。

「んん……」

雪ノ下が寝返りをうったときのような声を出す。雪ノ下は何気に寝相が悪いからな……。もしかしたら俺の布団に入ってきたり、なんてこともあるかもしれない。

「ちゅ……」

今度はリップ音のようなものが聴こえてきた。な、何だ……？

「ダメよ、葉山くん……比企谷くんが起きてしまうわ……」

雪ノ下の小さな声が聴こえてきた。葉山がこっちの部屋にきているのか!?! 今日一番の衝撃に、心臓がバクバクと鳴り出す。

「じゅる、んっ……はぁ……」

夢の中で聴いたような雪ノ下の声が俺の耳に届く。雪ノ下と葉山の間で唾を交換するほどのディープキスが繰り広げられている。何としてもこの眼に焼き付けなければ……！

「っ……」

俺は少し声を漏らしながら雪ノ下の方向へ寝返りをうった。少しわざとらしかったか……？

「……」

「……」

こちらを伺っているような沈黙が流れる。

「あっ……んちゅ……」

また雪ノ下の声とキスの音が聴こえ始めた。どうやら行為を再開したらしい。状況を把握するために俺は薄目を開けた……。豆球が点いているからぼんやりとだが状況は分かる。

「はぁ……んっ……ダメよ……」

そこには布団の上に仰向けになっている雪ノ下と、裸で彼女の上に覆いかぶさって唇に吸い付いている葉山がいた。

掛け布団が2人の身体を包んでいて、さながら夫婦のセックスのように上半身だけ布団から出している。

雪ノ下の浴衣は葉山に乱されたのだろう。中途半端にはだけて、綺麗な乳首がチラチラと見え隠れしている。

「雪乃ちゃんも浴衣の下に何も着てないなんて。俺を待つてたんじやないのか？」

「それはっ……比企谷くんとしていたからよ……」

「ふーん、じゃあ雪乃ちゃんの下がこんなになってるのも比企谷のためなのか」チュク

「んんっ……」

「んっ、やめ……」

雪ノ下がせてもの抵抗か、葉山の肩に手を置いて前に押す。

しかし葉山は男の力に物を言わせて雪ノ下の鎖骨の辺りに口をつける。

「んんっ……」

強い吸引の音が聴こえてきた。どうやら葉山は雪ノ下に自分の印を付けたようだ。

葉山は自分の唇を雪ノ下の身体にくっつけたまま、ゆっくりと下に移動させていく。

「ああ……」

ついに葉山の唇が彼女の乳首を探し当てた。葉山が遠慮なしに雪ノ下の乳首を吸う

と、雪ノ下は首を後ろに少しだけのけぞらせて喘ぐ。乳首の状態は確認できないが、おそらくピンと自己主張するように立っていることだろう。

「んんっ……やっ……」

葉山は乳首を攻めながら、手で性器も愛撫しているのか、強い水音が聞こえ始めてきた。

「入れるよ……雪乃ちゃん……」

今ならまだ間に合う。もし雪ノ下がさっきの夢のように葉山の虜になってしまったら。

「待って……」

「まあまあ……そう言わずに……」

「んんんっ!!!」ズプ

俺は結局、自分の興奮を優先してしまった……。

「入れただけでイッたのか？」ヌリユヌリユ

2人の身体が布団の中で前後に動き始める。葉山は雪ノ下の耳元で囁きながら、大きな音を出さないようにゆっくりと腰を振っている。

2人の身を包んでいる布団がゴソゴソと動く。

この眼で確認することはできないが、間違いなく2人は布団の下で繋がってしまっている……！

「ちがつ……あん……」グチュグチュ

雪ノ下は目を閉じ、口をちよつと開けて喘いでいる。

「ひ、ひき、がやく……」

雪ノ下が目を開け俺の方に顔を向けた。起きているのがばれたと思った俺は一瞬ドキツとして、身を固くした。

しかし、雪ノ下は俺に助けを求めるように手をこちらに伸ばしてくるだけだった。

「駄目だよ」

「ひやつ……」

葉山はそんな雪ノ下の動きを封じるように、布団の中で手をもそもぞと動かす。動いた位置からして、彼女の太ももを撫でたといったところだろうか。それだけで雪ノ下の手はパタリとその場に落ちてしまった。

「あつ、あつ……」ズチュズチュ

またゆつくりと葉山のピストンが始まった。

「はあ……いや……やめて……葉山くん……」ヌツチュヌツチュ

雪ノ下の声に余裕がどんどんなくなってくる。しかしここで葉山は雪ノ下にさらに追い打ちをかける。

「雪乃ちゃん、確かここが好きだったよな」ズン

「あ……だめ、だめっ……はあ、あん……そこは……」ヌリユヌリユ

葉山は俺が隣にいるのも関係ないとばかりに、腰の動きを激しくして、雪ノ下を高速ピストンで追い詰める。しかもおそらく、雪ノ下の弱い所に。

「はあ……はあ……はあ……はあ……葉山くん……だめ……！んんんんっ!!!」

雪ノ下がいく寸前で、自分の両手を口にあてて、大声を出すのを防いだ。そしてその体勢のまま肩で息をしながら呼吸を整えている。

「いやあ……」

雪ノ下はかけ布団から這い出て、葉山から四つん這いの体勢で逃げようとした。雪ノ下の着ている浴衣は乱れに乱れており、ほとんど上半身も下半身も丸出した。

「どこへ行くんだ？」

葉山は雪ノ下の腰をガツシリと掴み、雪ノ下を布団の上に強引に戻した。そしてそのままガチガチに勃起したペニスを雪ノ下の中にぶち込んだ。

「ひっ……あつ、やつ……あつあんっ」グッポグッポ

雪ノ下は気持ちよさそうに目を閉じて喘ぎ続ける。

「比企谷とのセックスは満足できたかい？」ズンズン

「あ、当たり前、でしょう……あんっ」ヌプツヌプツ

「本当か？」パンパンパン

葉山はさらに荒々しく、野生動物の交尾のように雪ノ下を攻め立てる。

「っ！お願い、もつとゆつくり、はあっ♡」

雪ノ下は自分で気づいていないかも知れないが、次第に雪ノ下の声色は快樂の悦びで染まり始めている。

「んあっ♡あっ♡んっ♡んっ♡んんんっ♡」ビクツビクツ

雪ノ下の身体が痙攣し、両手の力が抜けたのか枕に顔を突っ伏してしまう。

「や……まだ私……いやあ……んんっくくく♡」

それでも葉山は突くことをやめない。雪ノ下は絶頂のまま戻って来られないのか、枕に顔を沈めたまま、首をイヤイヤと振っている。

「もう少しだ。我慢してくれ」パンパンパン

「はあ……はあ……もう……無理よ……ああん……♡」パチユツパチユツ

葉山のただでさえ速いピストンがさらに速くなる。それに追いつめられた雪ノ下はさらに甘い喘ぎ声を出す。

「出るっ！」

瞬間、葉山が身体を震わせて射精をした。避妊はしていたようなので中出しはしていないだろう。

「そうだ」

雪ノ下が呼吸を整えている最中、突然葉山が何かを思いついたように、呟いた。

「はあ……はあ……な、何かしら……？」

葉山はまだ息の荒い雪ノ下の身体を持ち上げて、そのままスツと立ち上がった。

「葉山くん……？何を……？降ろして……」

雪ノ下はお姫様抱っこで抱えられながら困惑した声を出す。葉山は雪ノ下の抗議を聞かず、そのまま障子を開けて向こうの部屋に入ってしまった。雪ノ下を取られた気がして焦燥感が湧いてくる。

何をするつもりだ……？向こうは読書用の灯りがついていようだ。小声で何かを話しているようだが、障子がきっちり締められているため聞き取れない……。俺は何とか内緒話を聞き取ろうと目を閉じて耳を澄ます。

「あ……あ……あ……あん……んんんんっ……♥」

雪ノ下のいやらしい嬌声が聴こえたので、目を開けて障子に目を向ける。するとそこ



には騎乗位で貫かれているような雪ノ下の黒い影が障子に映っていた。

「やん……こんな……知らないわ……ああん……♡」

雪ノ下の声がかつちの部屋まで響いてくる。下から雪ノ下の身体が突き上げられて、雪ノ下の髪の毛も激しく揺れる。

「雪乃ちゃん、自分で腰を振ってみて」

雪ノ下の腰を捕らえていた葉山の手の影が、ゆつくりと下へと下がっていく。

「……こうかしら……んん♡」

雪ノ下の影は自ら快楽を求めて浅ましく腰をくねらせる。

「」

雪ノ下は身体を前に倒して、葉山の耳元に口を近づけて、ボソボソと何かを囁いた。一体何を言ったんだ……？

「嬉しいこと言ってくれるな……」

葉山が喜ぶようなことを雪ノ下が言ったのか!?

悶々としているうちに葉山の手の影がまた雪ノ下の腰をガツシリ掴んで、激しく影が揺れ始める。

「はあ……はあ……はあ……んん……」

「今夜はひと晩中可愛がってあげるよ」

「そんな……私、きつと耐えられないわ……」

それから睡眠欲に負けてしまうまで、俺はあらゆる体位で妖艶に絡み合う2つの影を目に焼き付けようと凝視していた。

朝5時、俺は自然と目が覚めた。睡眠欲に負けてしまったせいで昨日の葉山のファインプレイ（夜這い）を最後まで見ることができなかった。昨日のアレが夢ではないということは雪ノ下の姿がないことから明らかだろう。

「まさか……」

喉が異常に乾いている。俺はおそるおそる障子を少しだけ開けて、葉山の部屋を覗いた。

「ッ!!!」

目に飛び込んできたのはひとつの布団。その中には夫婦のように寄り添って、健やかな顔で眠っている葉山と雪ノ下雪乃がいた。

## 5 話

雪ノ下と葉山がさながら夫婦のように寄り添って布団の中で寝ていた。

それは衝撃的で刺激的だったが、布団の周りに散乱している夥しい数の使用済みコンドームが生々しく、2人がひと晩かけて愛しあってしまったことを想像させた。

「くっ……………」

興奮のあまり思わず目眩がし、少しふらついてしまう。

しかしまだ確かめなければならぬことがある。それまでは俺は死ねない……………。映画の主人公のような気分で、ふらふらと2人が仲睦まじく寝息を立てている布団のまとまで進む。

「……………」

寝起きドツキリをしかけるように、そつと布団をめくる。そこには俺の想像した通りの光景があつた。

雪ノ下の浴衣は乱れており、下半身を隠しきれているとは言えない。それは昨日の2人の激しいセックスを見ていれば理解できる。

そして生で中出し子作りセックスに至ってしまうこともまた必然だったのだろう。

雪ノ下の股間には、彼女を孕ませようとする葉山の精液がべっとり付着していたのだ。それを認識してしまった瞬間、俺はいつかと同じように意識を手放した。

「……………ガヤくん、比企谷くん」

名前を呼ばれながら、ゆさゆさと身体を揺さぶられ、俺の目は一瞬で醒める。

「……………雪ノ下」

「……………あなたは どうしてこちらの布団に頭だけ突っ込んで、気絶したように眠っていたの？」

雪ノ下は心底分らないというキョトン顔をつくり、疑問を投げかけてくる。

「そりやお前……………お前が葉山に夜這いかけられて、こっちの部屋に連れていかれて、散々セックス漬けにされて、拳句に中出しまでキめられたから、だろうな……………」

「……………まあ、起きているかとは思っていただけれど」

「俺が起きているかとも思っていて、あんなに乱れていたのか？」

「前にも言ったと思うけれど、葉山君と交わると、そんなことを考える余裕はなくなってしまうの」

「だろうな……………最高だわ……………それで、今回はどうだった？」

「もう……………。……………正直に言うと、ひと晩かけて快感をじっくり身体に教え込まれて

しまったといったところかしら。これ以上は本当にあなたの側にいらなくなるかもしれないわ」

「そ、そこまでか……………」

「ええ、天文学的数字のレベルで、相性がいいのでしょうね。彼と」

雪ノ下は顎に手を拳を当て、思案顔で自分と葉山の身体の相性を分析する。

「まあ、貸出しプレイという背徳感も上乘せされているから、一概には言えんだろうがな。ま、今回の夜這いはマジでフラインプレーだったわ。正直もう思い残すことはない……………」

「満足したならもうこれつきりにしてくれと助かるわ。私の身体が葉山君の手に墮ちていく感覚が分かるようになったの」

「分かったよ。お前には散々俺の願望をを聞いてもらったしな。全て遠き理想郷に至ったんだ……………」

「よく分からないのだけれど。まあいいわ、帰りましょう。葉山君は準備して車に乗っているわ」

「ああ、分かった」

雪ノ下は葉山にドロドロにされた身体を洗って風呂上がったばかりだったのか、髪をテキパキと結い上げ、ポニーテールにした。

超可愛い。この旅行には最小限の荷物で来たので、服装は昨日と同じで、黒のケーブルニツトに青のジーパンである。

「……………では、先に行っているから」

「ああ、分かった」

俺が着替えようとして服に手をかけたのを見て、顔を赤く染め、サツと目を逸らして雪ノ下はテクテクと足早に去って行った。今更恥ずかしがることもないだろうに。2人の男の身体を知っているのに、ゆきのんは本当にかわいいなあ！

まあ、そんな女性が他人棒でよがり狂っている姿がまた乙だったのだが。ただのビッチが寝取られても誰も萌えないし、燃えないだろう。

「さてと、おまたせしましたよつと……………つ」

俺が車に着き、車に運転席に乗り込むと、2人は後部座席に乗っていた。まあ、そこまではいい。問題は葉山が大きく足を広げ、その間にちよこんと雪ノ下が腰掛けていたことだ。背もたれ代わりに、葉山に完全に体重を預け、目を瞑っている。

「えつと……………」

状況がこれっぽっちも理解できず、困惑の声を出す。

「ああ、比企谷。おはよう。よく眠れたようで何よりだよ」

この野郎。人の可愛い彼女をひと晩かけて犯して尽くし、さらになお独占するような

ことをしてよくも抜け抜けと……。思わず頬が引き攣り、頭に急激に血が上つていくのを感じる。

「雪ノ下……………」

「……………」

愛する彼女に声をかけるも、雪ノ下は反応を示さず、何も言わない。葉山から黙っているよう指示を出されているのだろうか。仮にそうだとしても雪ノ下がここまで従順に葉山の言うことを聞くとは……………」

「さあ、君は気にせず車を運転してくれ」

「……………んんっ」

こいつ……………」

葉山は雪ノ下の背後から両手を回し、雪ノ下の服の上から何の遠慮もなく彼女の胸を優しくゆつくりと揉み始めた。

雪ノ下の黒いニットの服が葉山の大きな手に揉みくちやにされ、その下に隠されている最近少しだけ成長した胸が圧迫に耐えられず形を変える。

それに呼応して、雪ノ下も悩ましげな嬌声を上げ始めるのに、そう時間はかからなかった。

「雪乃ちゃんの家に着くまでに、雪乃ちゃんが10回以上イッたら、雪乃ちゃんを1カ月

借りるからな」

「……………なっ」

雪ノ下はなおも葉山に背後からその形の良い胸をモミモミさせている。雪ノ下は何故黙って葉山の愛撫を受けているのか。さっきの雪ノ下の言動を考えると、全力で拒否しているんじゃないのか。

「ちなみに勝負を拒否すれば、この写真をばらまく」

「ああ、ん……………は……………あ……………んっ」

葉山は自らのスマホを操作し、一枚の写真を見せてくる。

俺はその写真を見て、心臓をギョツと掴まれたかのような衝撃を受け、動悸が一層激しくなる。

それは、雪ノ下が乱れた浴衣姿で、正常位から葉山の自慢のペニスにずっぷりと貫かれている写真だった。

それに写る彼女は、顔を赤く上気させ、だらしなく口を半開きにした、いわゆるト口顔をしており、さらには片手でピースをしている始末である。

こんなものをばら撒かれたら雪ノ下雪乃はひとたまりもない。雪ノ下が大人しく葉山の良いようにされているのに得心が行った。

「……………くっ、分かった……………」



俺はアクセルを踏み、車を動かし始めた。

「ん、はっ、葉山くん、本当に見損なつたわ……………」

雪ノ下が葉山を罵倒するが、そんなことはどうでもいいとばかりに雪ノ下の身体を愛撫していく。雪ノ下は身を振り、葉山の拘束から逃れようとするが、やはり根本的に力の差がある。雪ノ下は少しずつ着衣を乱されていく。

「おい比企谷。前を向いて運転しろよ、危ないだろう」

葉山の言い分はごもつともだ。さつきから後ろが気になりすぎて、非常に危ない運転になっている。

「比企谷くん……………私のことは気にせず、運転に集中して……………あああ……………」

先ほどの攻防で雪ノ下はベルトを緩められたのか、ジーパンの前部がガッツリと開いてしまって、ピンク色の可愛らしい下着が露出させられていた。

葉山は迷わず雪ノ下の背後からそこにズボツと手を突っ込み、ゆつくりと動かし始める。

「……………んっ、くっ、はあ……………」

緩慢な手の動きに反応して、雪ノ下が仰け反りながら喘ぐ。

「雪乃ちゃんが好きな所はもう知ってる」

「ん、はあ、はあ……………ん……………」

次第に葉山の手の動きが激しくなり、雪ノ下の声もまた激しさを増していく。呆気なく、ぐちゅぐちゅという水音も聴こえるようになってきた。

「だ、め……………いやっ……………はなして……………あん♡」

絶頂が近いのか、雪ノ下がイヤイヤするように首を横に振る。快感に耐えるように目を瞑り、声を出すまいと片手で自らの口を塞ぐ。

葉山はそんな様子を見、そんなことは許さないとでも言うように目を瞑り、雪ノ下の口に手を差し入れ、無理矢理喘ぎ声を発させる。

そしてポニーテールにしたせいで露わになっている雪ノ下のうなじに口をつけ、強い吸引の音が聴こえた瞬間。

「ああああ……………」

雪ノ下からひと際大きな嬌声が車内に響き渡り、雪ノ下の身体がびくん！と震えた。

「まずは1回だな」

「はあ、はあ……………」

ちよつと待つてくれよ。まだ走り出して数分だぞ。葉山はこんなにも容易く雪ノ下をイカせることができるのか。悔しさでハンドルを握る手に力が入ってしまう。全く勝てる気がしないぞ……………。

雪ノ下はイカされた余韻に支配されているのだろう。目は少し焦点が合っておらず、

口を開け、真つ赤な顔で肩で息をしている。

その隙を突き、葉山は雪ノ下の両手頭と身体を抱き、身体を優しくシートに押し倒す。そして。

「……………」

ちゅつという音の後に、間髪入れずにじゆるるつという深いキスの音が聴こえてくるようになる。

「あ……………こ、れ、だめ……………ちゅぶつ」

今のバックミラーの角度では、2人のキスを見ることが出来ない。

入ってくる情報は音声。それと雪ノ下を手籠めにし、もぞもぞと抵抗する雪ノ下の華奢な身体にのしかかって絡みつく葉山の背中だけ……………」

「んむ……………ちゅつ……………あ……………あ……………」

「ヤ……………チュル、チュパツ、あツ……………や、め……………や、チュ……………はア……………?」

「ジュルツ、ジュパツ、あ、あ、ア……………ジュルルルツ！」

「あああ……………アツ、ジュルツ……………えアツ……………ン……………んんツ……………?」

葉山の口付けが激しくなるにつれて、雪ノ下の声には抵抗の色が薄れ、劣情の色が次第に混ぜられていく。この反応に雪ノ下の意思は関係ない。

葉山の、まるで十年來の愛を注ぎ込むようなキスに、強制的に快樂の道へ導かれてし

まっているのである。雪ノ下の気持ちとは裏腹に……いつの間にか、葉山を抱きよせるように両手が彼の背中に添えられている……。

2人が求め合っていると錯覚するような情熱的なキスの音を聞き続けること15分。葉山がおもむろに身体を下にずらし、なんと雪ノ下が着ているニツトの中に己の顔を潜り込ませた！

「はあ……………、ちよ……………なに、い……………やあア……………」

キスの嵐から解放された雪ノ下が困惑の声を上げたのも束の間、すぐにまた喘ぎ始める。

「ア……………やつ、ダメ……………あああ……………」

雪ノ下の着衣の中でもぞもぞと葉山の頭部が動いているだけなので、詳細は分からないが、雪ノ下の媚肉をしやぶりあげているような水音が聞こえる。

おそらく葉山は雪ノ下の着衣の中で、彼女がブラを着けていることは御構い無しに、持ち前の舌技でひたすら雪ノ下の可愛い乳房を蹂躪しているのだろう。

「……………はあ、んん、ふっ、ア……………うああ……………」

「本当、良い反応してくれるなあ。もっといじめたくなるよ」

「や……………ああん♡あああつ……………」

ひと際大きなじゅぶっという何かを吸う音とともに、雪ノ下は大きな嬌声をあげる。

あの淡いピンク色の乳首を吸われたのか？さすがにイッてはないようだが、雪ノ下は葉山の頭に両手を添えて荒く呼吸をする。

「きゃっ……………」

葉山が後部座席のシートを全て倒し、手早く雪ノ下の熟した身体を移動させる。葉山の思惑か、ちょうど斜めに寝かされたおかげで、バックミラーでも2人の身体がバツチリと見えてしまう。

雪ノ下の顔はすっかりと出来上がってしまっている。目を閉じてはいるが、上気した表情は興奮の色は隠しきれていない。

ここままで約30分が経過し、高速に合流した。雪ノ下の家まで後1時間半くらいか……………」

そして考える隙を与えないとばかりに、葉山は一気に雪ノ下のジーパンを掴み、剥ぎ取りにかかった……………」

「だっ、ダメっ！葉山く、んんっ♡」

防波堤を死守しようと思いつくほど膝のあたりまで脱がされ、とどめにキス。葉山は雪ノ下の頬に両手を添え、強引に唇を奪い、器用に足でジーパンを完全に脱がしきった。

下着もあつという間に剥ぎ取られ、せつかくガードを固めていた雪ノ下の下半身が、

葉山の手練手管で無防備にされる。

カチャカチャというベルトを外す音がする。その音はまるで今から雪ノ下をぶち犯すという予告のようで、強烈な興奮を覚える。

ギンギンに反り返った、明らかに俺のモノよりも巨大なそれが雪ノ下の秘所にあてがわれる。

いよいよ本番で雪ノ下が犯されてしまう。早く家に着かなければと考え、俺は車のスピードを上げる。制限速度など知るものか。法律など守っているのは雪ノ下が葉山に取られてしまうではないか。

「う……………」

女性の膣の形を簡単に変えられる凶悪なカリをした亀頭を生で挿入すると、ぐちゆり！という大きな音と共に雪ノ下はくぐもった声を漏らす。

「あ……………あ……………ん……………」

承諾もなしに生で入れて、焦らすように浅い部分をカリで削るように攻められている。

「ああ……………♡やあ……………♡はあっ♡」

「もっと欲しかったらおねだりするんだ、ほら」

あの雪ノ下雪乃に本気ピストンのおねだりをさせようと、葉山は小刻みにひたすら腰

を振る。

「あああ………う？」

そんなはしたないことはしたくないとイヤイヤと雪ノ下は首を振る。

「ほら、ほら」

いつも男の視線を釘付けにしている程よい太さの太ももをガツチリと捕まえ、攻め続ける。

しかし15分間、雪ノ下は首を縦に振ることはなかった………。

「………くそ。やっぱり雪乃ちゃんは一筋縄ではいかないな。まあ、そこがまた良いんだけど、なっ！」

語尾を強くし、雪ノ下の腰を両手で荒々しく掴み、会心のひと突きを与える。

「やああ？」

雪ノ下の甘い絶叫が車内に響く。ただのひと突きで簡単に達してしまった雪ノ下はその艶めかしい身体をビクビクと震わせている。

彼女を休ませるつもりが全くないのか、葉山の本気のピストンが出すパンパンという規則的な音が聞こえる。

非常に後ろは気になるが、雪ノ下を葉山から救うためにも、今は運転に集中しなくては………。

「いやっ? ああんっ? んんっ?」

「うあっ? やっ? あああ?」

「ああっ? んんっ? あんっ? あっ?」

「あ? あ? あ? あ? あ? あ? あ? あ? あ?」

「んんゝゝゝっ?」

「こっ……こわれる……? やめ? ひああっ?」

「んあっ? あっ? んっ? んっ? んっ? んんんんっ?」

「んっ……? はあ? やあん?」

「ん、はあ……やん……?」

もはやオスを喜ばせようとしているとしか思えないピンク色の声を聞きつつ運転すること約1時間。

ようやく高速を降り、下道に入った。前ばかり見ていたもので、後ろで喘いでいるのは本当に俺の彼女の雪ノ下雪乃だったのか? もはやそんな疑問まで湧いてきてくる程だ。

そして久々の信号停車で後ろを見ると。

「あっ、あっ、やん? だめっ……? んんんんんっ?」

俺の最愛の彼女の雪ノ下雪乃は、上半身は服で完全に隠されているものの、下半身は丸出し。



蛙のように両足をはしたなく開き、これでもかというほどに雌らしい格好をしてしまっている。

さらに葉山の一物でその膣をいやらしく、ぐちゅぐちゅと鳴らし、身体を色っぽくねらせて、もはや何度目か分からない絶頂に震えている。

クロスした己の両手で顔を隠しており、その表情を窺い知ることはできないが、隠されていけない口元には悦びの色がみえる……。

「雪乃ちゃん……！」

雪ノ下が絶頂を迎えるのとほぼ同時に、持ち前の性技で雪ノ下を喘がせていた葉山も身体を震わせ、雪ノ下を我が物にせんとする欲望を雪ノ下の中に全て吐き出す。

当たり前のように生挿入だったので、その精液は雪ノ下の体内に侵入し、その子宮をいつかのように犯し尽くす……。

「ふう……これで9回……かな」

「はあ……う？はあ……う？はあっ……う？ちがう……う？はちかい……う？」

悩ましげに息をしながら、葉山の宣言にせめてもの抵抗を試みる。しかし、それでももう8回もイカされてしまっていることには変わりはない。

雪ノ下の家に着くまでの約10分で2回絶頂に導かれると、雪ノ下は1ヶ月もの間葉山専用になってしまう……。

息も絶え絶えの雪ノ下の様子を見ると、はつきりいつて絶望的にしか見えない。

「はは、そうだったか、じゃあ続きをやるろうか」

そんなの誤差だと言わんばかりに軽く笑い、自分は仰向けになり、満足に動けない雪ノ下の身体を器用に動かし、背面騎乗位の体勢作り、雪ノ下の腰の部分を両手でロックした。

雪ノ下がフロントの方を向く体位のせいで、バックミラー越しにすつかりトロトロに蕩けた雪ノ下とバツチリ目が合ってしまう。雪ノ下は眉を八の字にし、困ったような顔を作り申し訳なさそうに俺を見る。

「……比企谷く、ん……ふ……めんなさ………いい？、あん？もう、だめ……ううっ？」

しかし雪ノ下は再び始まる貫きの刑によって一瞬で淫靡な世界へ引き戻される。

不貞のバレてしまった貞淑な妻のような表情を作った雪ノ下が、下半身にはズツプリとアレをくわえ込んでいる状況に、

そしていつもは凜としている彼女が単純な上下運動でだらしない顔をさせられているという現実には情けないが昂りを覚えてしまう……。

しかしこの状況を作ってしまったのは俺自身だ。雪ノ下は何に対して謝ったのだろ

うか……？

「あつ？あつ？あつ？あつ？あつ？」

女性を鳴かせるためだけに設計されたかのようなグロテスクなペニスを何度も突き刺されている雪ノ下を見るのを止め、パンパンパンという肉と肉が激しくぶつかる音を無視し、沸騰しそうな頭を無理やりクリアにし、ようやく気がついた。

雪ノ下は必死に快楽に抗って、俺の側にしようとしてくれていたのだ。しかし、その気高い気持ちも葉山の凶悪なピストンの前にはまっさらになっちゃってしまっただけだ。

もうだめかもというのは、もはや限界が近い、ということだ。だからこそその謝罪、だったのだ。そこまで考えついた途端、様々な感情が入り混じり、俺の情けない息子ははち切れんばかりに膨らんでしまう。

「あ、あ、あ~~~~っ?」

断続的な激しい突き上げによって、雪ノ下の嬌声が奏でられる。葉山との数回の交わりで、すっかりメスの身体にされてしまった雪ノ下にとって、その快楽はもはや努力とか我慢とかで耐えられるものではないのであろう。

耐えられないと悟ったのか、葉山の両足に自らの両手を着き、雪ノ下は受けている悦楽から直接的に逃れようとする。すると葉山は少し動きを止め、彼女を観察している。そして何を思ったか。彼女の服の上から腰を捕まえていた両手を離れた。

どういうことだ……？葉山のヤツ、ペニス漬け地獄から雪ノ下を解放する気になったのか……？

「ん、ん、んゆ……」

雪ノ下が最後の力を振り絞り、可愛い鳴き声を上げながら腰を上げていく。雪ノ下の腔からペニスが亀頭まで抜け、ズプツという生々しい音が聴こえる。葉山の意図は分からないが、これで勝負は俺達の勝ち……。

「いやいや、俺が君を逃す訳ないだろ？」

「ひっ？そんなっ？やあああっん……？」

甘い絶叫が車内に響く。何事かを見ると、逃げようとした雪ノ下が腰を上げた所まで、葉山は腰を浮かせ、そのチンポで彼女を追撃していた。

だらしなく口を半開きにして目をパチパチとさせ、雪ノ下は脱力したようにずるずると葉山のチンポに導かれていく。

「あう………??」

再び絶頂してしまったのだろう、ビクンビクンと身体は揺れ、両手を後ろにつき、どうにか息を整えようとしている。しかしそれは叶わない。葉山が小刻みな運動を始めたからである。

「まって……？葉山君……？まだっ……？イツ、てる……からあ？」



……。

そして。

「いやっ? やっ? やっ? やん? あああああつ??」

雪ノ下は今ままで一番大きな絶頂に淫らな嬌声を上げ、身を仰け反らせ、葉山のモノは身体につき刺さったまま、ぐったりと動かなくなってしまった……。

「ふう……よし」

葉山が短く息を吐き、ぐいっと身体を起こし、脱力して項垂れている雪ノ下を支えるように両手で優しく抱きかかえた……!

「ひ、比企谷くん、あなた……」

雪ノ下は俺が家に着く寸前で自分でも訳もわからなくなってしまう、アクセルを緩めてしまったことを察知していたのだろう……。

「比企谷、約束通り雪乃ちゃんを1ヶ月借りるからな」

「……」

葉山の宣言を黙ってきく。弱みを握られている以上、俺にはもうどうすることもできない……。

「じゃあ、車を置いて帰ってもらえるかな」

「……く、分かった」

葉山の要求通り、俺は車を駐車し、イソイソと立ち去るしかない……。

「1ヶ月で雪乃ちゃんを最高の女に調教してやるよ」

俺が車を出る時を見計らったように、葉山は言う。クソツ、どこまでもムカつくヤツだが、本当に間男としてはパーフェクトだ……。しかし1ヶ月もあつたら、あのイキ狂いっぷりを見るに雪ノ下は完全にヤツの女になってしまっただろう。彼女を失う苦しみに俺は耐えられるだろうか……。

そして俺が立ち去る直前、車内の雪ノ下を見ると。

「あなたがそれをのぞむなら」

口の動きだけで雪ノ下は俺にそう伝えるのだった……。

## 6 話

雪ノ下が葉山に連れ去られてからあつという間に3週間経過した。

こちらからの連絡には応答・返信が一切ない。

雪ノ下のマンションにも行つたが誰もおらず、俺は自宅で途方に暮れていた。

「……」

もう、雪ノ下と会うことはできないのだろうか、いや葉山は1ヶ月雪ノ下を借りると言っていた。まだ望みは……。

いや、葉山は雪ノ下を自分に取られても文句を言うなよと言っていた。あの時はそれはありえないと断言した。今は……どうだろうか。

雪ノ下は自分が葉山と付き合うかもしれないと思わないのかと訊いてきた。今は……。

「雪ノ下……」

俺が答えないの自問自答を繰り返し、過去最悪の絶望感に苛まれていると、ポコンというメッセージアプリの着信音が聞こえた。



まさかとは思いながら、震える手でアプリを開くと雪ノ下からメッセージが届いていた。

「久しぶりね。比企谷くん」

なぜ突然連絡をくれたのだろうか。雪ノ下は俺に別れを告げるつもりなのではないかという最悪の想像が頭によぎってしまう。

「すまん、電話できないか」

俺はアプリで返信する。しかし……。

「電話は禁止されているの」

「葉山にか？」

「ええ、そうよ」

やはり雪ノ下は葉山と一緒にいるのだ。今までは俺への連絡は禁止されており、雪ノ下は律儀にそれを守っていた……のだろう。

「無事なのか？」

「比企谷くんに見捨てられた時は驚いたけれど、普通に外にも出られるし、大丈夫よ」

雪ノ下のメッセージには明らかに俺を責める意図があり、少し怯んでしまう。しかし雪ノ下の言葉も聞き捨てられないものがあつた。

「外に出られるのか？」

「ええ」

「1人ですか？」

「そうよ」

「じゃあ、3週間何をしていたんだ？」

俺に連絡せず、3週間放置していたということはやはり俺は雪ノ下に捨てられてしま  
うんだろうか……という意味を込めて彼女に尋ねる。しかし返信がなくなり、15分  
が経った。既読はついているんだが……。

「分かってるでしょ？」

「セックスよ」

急激に頭に血が上り、頭が沸騰しそうになる。今事切れたら歴史書に憤死と記されて  
いたことだろう。俺が歴史書に載ることはないって？うるさい、そんなことは分かっ  
ている。

頭から血が引いていくのを感じたら、今度は下半身の1部に血が集まり、硬くなつていった。

やだ、俺の身体超忙しい……。

雪ノ下は以前はセックスのことをもつとぼかした表現をしていたのに……。

この変わりよう……。

いかに雪ノ下が葉山の影響下にあるかまざまざと見せつけられた気分になる。

「何回くらいだ……？」

「そうね」

「数えた訳じゃないけれど、貴方とのセックスの回数は優に超えていると思うわ」

雪ノ下の告白に頭が狂いそうになる。ああ……。雪ノ下はもはや俺の彼女といえるのだろうか？

「毎日恋人として街に出て、夜は夫婦のようにセックスしていたの」

雪ノ下は俺に追い討ちをかけるように告白を続ける。雪ノ下と葉山が手を恋人繋ぎして街に繰り出していた……？

ぐ、うう……。夜は夫婦のように……雪ノ下と葉山が毎日そうするのが当たり前ように……？

いや、雪ノ下と葉山の身体の相性の良さは尋常ではない。一般的な恋人夫婦のセック

スの回数で済んでいるとはとても思えない……。

「どれくらい気持ちよかったんだ？」

「はあ……比企谷くんあなた……本当に変態ね」

「そうね……」

「貴方とどういう風にしていたか分からなくなるくらいよ」

ああああああああ！もはや言葉が出てこない！

「後1週間で戻ってくるのか？」

なんとか意識を保つ。これだけは今雪ノ下に絶対訊いておかなければならない。

「さあ、どうかしら……。このまま葉山君と付き合うことになるかも」

「なんでだ？」

「だって、昼は楽しくて、夜は生きてきた中で1番気持ち良いの。最高じゃないかしら？」

ああああアアあああ!!!3週間前とまるで違う雪ノ下の様子に叫び声をあげながら発狂してしまう。

それ以後、雪ノ下からメッセージが返ってくることはなかった……。

その夜、メッセージアプリで葉山から動画が送られてきた。動画のサムネイルは暗

く、何の動画かは分からない。見てはいけない。それは分かっていたはずだ。しかし、俺の震える手は決して動画に向かって止まることはない……。

動画を再生する。ここは教室だろうか？遠景で取られているようで、教室しか見えな  
い。不思議に思っていると画面が揺れた。

「さて、こんなものかな」

「……」

ドクン！と心臓が高鳴る。画面には総武高校の制服姿の雪ノ下 が映し出されている……！雪ノ下は己の身体を抱くように両手を胸の前でクロスさせている。

まさか、高校時代の映像？ いやいやいや、雪ノ下の少し大人びてきた顔を見て今の映像だと分かるだろう……。

雪ノ下の頬はほんのりと赤らんでいる。

葉山が制服のベルトを外しながら近づくと、雪ノ下は首をふるふると横に振りながら後退りする。

「や、やめて……」

「……」

しかし、葉山は雪ノ下の懇願に耳を貸すことはない。葉山は雪ノ下の華奢な身体を正面から力強く抱きしめた……！

「あ……」

ただそれだけで雪ノ下の抵抗は無くなり、ギュツと握られていた彼女の掌は諦めたように脱力して下される。

「く、ああ……♡」

葉山はゆっくりと両手を彼女の身体のラインになぞらせて、降ろしていく。つい先程まで抗議していた彼女の声が甘く蕩けていく。

そしてついにスカートの中に手を入れる、そのまま彼女のスカートを捲り上げた！

葉山の狼藉で捲り上げられ、露わになった雪ノ下の美しく細い足には、なんとヤツのものであろう白い液体がべつとりついており、彼女の履いている黒のニーソックスに向かってじわりじわりと垂れていく。

「い、やあつ」

雪ノ下は顔を真っ赤に染め上げながら、葉山に抵抗するようにスカートを抑える。

その後、葉山は衣服を脱ぎ捨て、雪ノ下に机に手をつかせて立ちバックで挿入の体勢をとった。

雪ノ下は身体を好きに触られても抗議の声は上げず、むしろ葉山に協力しているようにも見える……。雪ノ下はバックで挿入されるのを待つ体勢のまま葉山の方を振り向く。頬を染め、眼を半分位に開いたその流し目は、明らかに期待の色が灯っていた……

!

「はは、期待しすぎだろ、雪乃ちゃん」

「ああ、アアアアツ！ツン??つはあ??やあ………??んツ??ああ??」

雪ノ下は最初のひと突きで獣のような嬌声をあげ、これでもかと言わんばかりの凄まじいピストンに鳴き声をあげ続ける。

小さな液晶に映る彼女は、俺が初めて恋をした高校時代の雪ノ下雪乃の格好なのに。

しかしもはや雪ノ下の中身はあの時とはまるで違って、間違いない葉山の色に染められていて……。

ああ、俺が今までやってきたのとはこういうことだったんだ。葉山によって雪ノ下との思い出を全て塗り替えられる。

おそらく、葉山であれば、1ヶ月もあれば容易くそれを達成するだろう。

雪ノ下との淡い高校時代の記憶が葉山の肉欲に上書きされていくような錯覚に俺は陥っていつていた……。

今度こそ俺は雪ノ下雪乃を葉山隼人に完璧に寝取られてしまうのだ。そしてそれが達成されつつあることは、つい先ほどやり取りした雪ノ下からのメッセージからも想像できた……。

「ああああああ………雪ノ下………」

「あ??あ??あ??あん??アツ??は??や??ンンン??」

葉山から腰を力ずくで掴まれて、前後に揺すられ弓形にのけ反って、喘ぎ続けている。  
「ふっ、ふっ」

葉山は一定のリズムにたまに緩急つけて後ろから雪ノ下を追い詰める。

「や??はあ??むり、い??」

葉山が力強く彼女を貫いた時、スカートがめくられて、雪ノ下の形の良い腰にひっかかり、葉山の太いペニスをずっぷり啜え込んでいる雪ノ下の陰部が見えてしまう。



ひっきりなしに抽送を繰り返されることで、動画を撮る前に中出しされたであろう精液がブリュッと逆流する。

「く?? ああ?? 恥ずかしい?? やめ?? あん?? こんな格好?? だめ??」

「なに、言ってるんだ、あんなに、物欲しそうに、してたじゃないかつ」

「や?? ちがう?? ちがうの?? あアアア??」

葉山がめくれたスカートごと雪ノ下の腰を掴み直し、言葉でも雪ノ下を攻め立てていく。

「あ?? あ?? あ?? くる?? きちやう??」

ピストンを速める葉山の攻撃に更に雪ノ下の声に余裕がなくなっていく。

「くっ、うっ」

「あ、あ、ああ?? あ?? ひ?? あ?? んんんんんん??」

更に葉山の子種を受け入れ、雪ノ下の両足がピンと伸びる。それでも葉山は腰を振り続ける。

「うあ、うあっ?? うっ??」

葉山の追撃に雪ノ下は人語を話すこともできなくなり、ヤツの精液がべつとり付着したその両足は震え、だらりと脱力して葉山の動物的な受け続けている。

画面の中の雪ノ下に俺の声は届くことはない……。

## 7 話

雪ノ下が葉山に貸し出されてから、今日で1ヶ月。雪ノ下が望んで葉山と一緒にいるようなメッセージを送ってきてから1週間が経った。

飯はほとんど喉を通らず、何をしていたのかもよく覚えていない。こうして腐り果ている間にも雪ノ下が葉山のクソ野郎に抱かれていると思うと……もう八幡駄目かもわからん……。

いや、そもそもクソ野郎は俺の方だったのではないか、最愛の彼女を葉山に1ヶ月貸出すという最終的な選択を取ったのは俺だ。

ある種衝動的な選択だったとはいっても、こうなった責任は俺にあるといえる……。

そもそも俺は雪ノ下を葉山に差し出すようなことをして、何がしたかったのだろうか。

清廉で美しい雪ノ下が他人の棒でよがっている痴態を見たかった？

雪ノ下が困っている姿を見たかった？

最愛の彼女である雪ノ下が葉山の肉体に墮とされていく姿を見たかった？

美しい雪ノ下雪乃が俺の願いを叶えてくれるという優越感？

分らない。日付はもはや変わろうとしており、あと数分で葉山が雪ノ下を返すと約束した日はまもなく終わる。

そして……23時59分になった瞬間。

雪ノ下から俺のスマホにメッセージが届いた。

『私のマンションで待っていて』

これは……どういう意味だろうか。

考えながらも俺は雪ノ下のマンションへと向かう。雪ノ下のマンションの合鍵は、ある。コートの中にしっかりと入っている。

雪ノ下のマンションで直接別れを告げられる？

それとも……1週間前の2人の言動から考えると、部屋に踏み込んだら性行為の真つ最中ということも考えられる。

いや、答えがどうだろうと、俺には雪ノ下と会う義務がある。

「はあ、はあ」

震える手で雪ノ下のマンションの合鍵を使って、中へ入る。

そして玄関から入ると家の電気はついておらず、リビングの方を覗きこんでも電気は点いていないようだ。

リビングに行く前、目に止まってしまったのはやはり寝室だ……。

もしかしかたら、この扉の向こうで……最初の貸出しの時膨らませていた妄想の時のように、雪ノ下と葉山が愛し合っているのではないか……という最悪の想像をしてしまう。

ドアノブを掴んだまま、俺の手は動いてくれない。心臓もバクバクと、鳴り止む心配はない……。

「ふう………」

覚悟決め、ドアノブを捻る。そして、俺の眼には……

誰もいない寝室が映った。

「え？あれ……？」

想像と違う光景に思わず肩透かしをくらった気分になる。いやいや、最悪の想像が外れたんだから、喜ぶべきだろ、俺。

そして、ガチャリと後ろから玄関のドアを回した音がした。

……ゴクリと自分で生唾を呑む音が聞こえる。

それから、数十秒、俺は玄関の方を見ることができないでいた。

玄関から入ってきたのは十中八九雪ノ下だろう。しかし、俺のことは見えてはいるはずなのに、向こうから声をかけてくることはない。

おそるおそる玄関を見ると……

1ヶ月前となんら変わりのない雪ノ下雪乃がゆつくりとした足取りでこちらへ近づ

いてきていた。

凜とした表情に、堂々とした歩み。

その姿は俺の記憶と違う所はない。しかし、その身体は確実に、葉山の好みに仕上がっているはずで……。

俺はその事実を目眩を覚え、雪ノ下に対してやはり喋りかけることはできない。

やはり、この場で別れを告げられるのだろうか……？

考えている内に雪ノ下は無言で見る見るうちに近づいてきた。

ん……？

何か、思ったより近づいてくるのね……？

「……」

雪ノ下の顔と俺の顔はもはやキス1秒前な距離まで近づいている。

しかし、雪ノ下は口を開くことなく、俺の眼をじつと見つめてくる。無表情で感情の読み取れないその眼光に捕まり、俺は全く身動きがとれない……。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……ふっ」

「あふっ……」

雪ノ下が俺の耳に口を近づけてきたかと思うと、次の瞬間、俺の耳に突然快感が走つた……！

唐突な快感に思わず情けない声をあげてしまった。耳は反則。耳はレッドカードです。

「……え？な、なに……」

「……んんん」

「……」

混乱し、後退りながら耳を押さえる俺に、雪ノ下は俺の顔を両手で抱き込み、不意打ちにキスをかましてきた……！

「……う」

「ん……」

雪ノ下は当たり前前のように舌を侵入させてくる。以前のととは比べ物にならないほど技術が向上しており、前後不覚になりそうだ……。

「……は、はあ、はあ」

「……ふう」

あまりの快樂に足が笑い始めた俺を見た雪ノ下は小悪魔的に笑い、ご馳走様と言わんばかりに口元に手のひらを当てる。

「……あ」

「……」

雪ノ下から腰に手を回されたと思ったら、いつのまにか2人とも寢室の中へ入っていた。

そして目の前にはベッド。

「……」

「……おふっ」

ばふっというベッドが軋む音と共に雪ノ下から仰向けに押し倒された。

そして俺に覆いかぶさるようにして雪ノ下もベッドに上がってきた……。

「ゆ、雪ノ下……？？」

「……」

俺の言葉を完全に無視し、雪ノ下は瞬く間に俺の身体から衣服を剥ぎ取っていく。も



う速すぎてらいつ脱がされたのってレベル。

「雪ノ下、話を……………」

「野暮なこと言わないの……………ね？」

そして、雪ノ下も身につけていた衣服を自分で脱ぎ、全裸になった。

その表情に、恥じらいはない……………。

トロンと蕩けたように目蓋の落ちた眼は情欲に染まってみえる……………。

「……………くっ」

「……………」

あつという間に騎乗位の体勢で挿入されてしまう。ちなみに俺の息子はキスだけでバキバキにされていた。

「……………ぐ……………あ……………」

「……………ん、んっ」

その腰使いは明らかに1ヶ月前とは比べものにならない程に成長している。最初はゆっくり上下させていただけだった。

しかし、途中からの本気出すとも言わんばかりに激しく、縦横無尽にぐりんぐりと動いてくる雪ノ下によって、急速に射精感が高められるのを感じる。

愛撫もなしに入れたのに、やけに滑りがいい。

結合部をみると白濁液が漏れてきていた……。

確かに射精感はあつて、既に先走りでは出てしまっているだろうが、今雪ノ下から漏れ出ている精液程濃いものはまだ出ていない。

つまり……葉山に満タンにされてから帰って来たのだと察してしまふ……。  
その事実を認識してしまった俺は……。

「う……う……う……」

「……え？もう出たの？だらしがないのね」

情けなく、射精してしまった……。

「……続けるわ」

「え……ちよ……」

「……待たない」

「やめ……」

「……んっ、んっ」

俺の懇願もむなしく雪ノ下は肉棒を貪るように腰を振り続ける。

以前の雪ノ下のセックスとはまるで違う……。

雪ノ下のセックスの全てが奴に変えられてしまったのをひしひしと感じる……。

「ひい……」

「……ふう」

もはや何度目か数えるのすら諦めた俺の射精。

見ればやけにつやつやした雪ノ下が繋がったまま俺の上にしなだれかかってきて、俺の胸に頬擦りを繰り返していた。

さながらセックスモンスターというべきか……サキュバスゆきのん……略してサキュのん……。

俺は意識が遠のいていくのを感じ、その心地良い感覚に身体を委ねた。

――

「……はっ、雪ノ下！」

「……」

目を覚まし、横を見ると、裸の上に掛け布団をかけただけの雪ノ下が目をパチクリさせながらこちらを見ていた。

「……なに？」

「……いや、その……」

訊きたいことは山のようにあった。しかしまず……。

「さっきのは……」

「さっきの、というと先程のセックスのことかしら？」

「あ、ああ……」

「夜に、隼人くんは何回も何回も絶頂する前で止められて……帰されたの。だから、我慢できなくて……」

「……は、隼人くんって呼ぶのな……」

「……まあ、彼とは1ヶ月過ぎして、確執もなくなったのだし、昔のようにそう呼ぶのが自然だわ」

少し考えるような素振りを見せ、雪ノ下は言った。

それにしても雪ノ下と葉山の確執がなくなった……。雪ノ下はやはり俺を捨てて葉山と付き合うつもりなのだろうか……？

「……」

「隼人くんは海外留学に行くそうよ」

「……ええ？」

俺の不安を読み取ったであろう雪ノ下がそう告げる。

「それでその……」

「……」

「俺との付き合いは……続けてくれるのか？」

「……そもそも比企谷くん、隼人くんは1ヶ月前私を『貸出し』たのはあなたなのだけだ。それで帰ってきた彼女に、その質問はどういうつもりなのかしら？馬鹿にしている  
としか思えないわ」

「……そ、そうか、すまん」

「じゃあ……葉山とはもう会わないのか？」

心臓が鳴る。1ヶ月前の雪ノ下なら絶対会わないと言う。今の雪ノ下は……どうだろうか……？もしかしたら……。

「……くす」

俺の問いに雪ノ下は悪戯っぽく笑い、そしてその顔はみるみる蠱惑的な笑みに変わっていく……。

「……さあ、どうかしらね。少なくとも情はあるから……。隼人くんが帰ってきたら  
また会うかも」

「う……あ……雪ノ下あ……」

思っていたとおりの匂わせる程度の答えに、俺は自身のメンタルがガタガタと崩壊していくのを感じる。

「……でね、これが私が隼人くんに出されてからだいたい2週間くらいの時の動画なのだけれど……」

そういつて雪ノ下はスマホを操作し、動画を再生して俺へ見せてくる……。

それはプロムの時の衣装で、男装っぽい格好の雪ノ下が葉山の逸物を丹念に舌を這わせている動画だった……！

雪ノ下は上目遣いで、ガチガチに勃起したそれをしゃぶりあげている……。

「あ、あああ……」

「……」

言葉を失い、頭を抱える俺を雪ノ下は心底愛しそうな表情でみている。

今、目の前で慈愛の表情を浮かべている彼女と、動画の中で葉山のモノを口に咥え、うつとりとした表情を浮かべる彼女を見比べ、俺は頭が狂いそうになる。

堪らず目をそらしても、動画からは『じゅぽじゅぽ』という水音が出ており、雪ノ下が葉山の逸物を頬張り、懸命に唾液を絡ませていることが分かってしまう……。

「私と隼人くんセックスの記録は後で隼人くんが比企谷くんのスマートフォンに送るそ

うだから。良かったわね、比企谷くん」

「あつ、あつ、あつ」

「ふふ、比企谷くんかわいい……」

思考が……。頭がおかしくなる……。

このままでは雪ノ下に脳を破壊されてしまう……。

とある空港の国際線のターミナル。葉山隼人は長椅子に一人で腰掛けていた。

「……………ふう」

「(留学がなかったらと考えたらゾツとするな。

それほど彼女との行為は気持ち良かった。

あれが、身体の相性というものなんだろう……。

本当に何もかも捨てて彼女の全てを奪いたいと思つて

しまった。だが……)」

「(あの家に深入りすると、本当に不味いことになる。この辺が潮時だろうな。まあ……  
たまたま遊ぶくらいなら良いが、雪ノ下家の人間と交際、ましてや結婚なんて俺には絶対  
務まらないからな……)」

「……………（比企谷、頑張れよ）」

そうして葉山隼人は激励として、1ヶ月間で撮影した全ての動画を比企谷へ送りつけ、自分のスマートフォンからそれらを削除した。

—

とある千葉市内のファミレスで、俺、雪ノ下、そして由比ヶ浜の3人で集まっていた。「いやー、なんかさ、3人集まるのも久しぶりじゃない?」

「そうね」

「……………」

由比ヶ浜は前会った時と変わらず元気満点といった様子だ。

雪ノ下が帰ってきてから毎日精力を搾り取られている俺に少しその元気を分けてほしい。

「いやー、高校卒業してからもう2年だけど、全然大人になってく感じしないなあ」

「由比ヶ浜さん、大人というのは歳を取れば勝手になれるものじゃないわよ」

「さ、さすがゆきのん、超大人っぽい!」

「それほどでもないわ」

「ていうかゆきのん、なんか雰囲気変わったよね」



「そう？自分ではそんなつもりはないのだけれど。どう変わってみえるの？」

「前より大人感が増してる気がする！ね、ヒツキーもそう思わない？」

「あ、ああ……………」

雪ノ下が変わったとすれば、間違いなく葉山の影響だろう…………。

「ヒツキーは何故かキヨドつてるし…………。なんか、ヒツキーげっそりして…………。え？あれ？も、もしかして…………？」

由比ヶ浜の頬がカーッと紅潮していく。

「まあ、由比ヶ浜さんが想像していることは間違いなく経験していると思うわ」

「う、うわー、冷静に返してくるんだ。やっぱすごい大人…………。何か置いていかれちゃったなあ…………。」

「正直、いくらでも置いていかれていいと思うわ」

雪ノ下が頭痛を抑えるように額に手を当てる。

「えー、そうかなあ？」

「そんなものよ。ねえ比企谷くん？」

「…………すみません」

「別に謝る必要はないのよ。私も愉しませてもらったし」

「ああ……………」

「え？え？な、何があつたの？」

「……さすがに貴女には教えられないわ」

「えー？教えてよー」

そう言つて由比ヶ浜は雪ノ下の肩を揺さぶる。

俺達の中身は確かに変わつてしまつたが、それでも変わらない日常があつても良いのかもしれない……。

## 番外編① 寝取らせに目覚めた比企谷八幡の夢

頭がボーッとする。歩きたびにふわふわするのが何となく心地良い。周りを見渡してみると、そこは総武高校の廊下だった。

「今日は学校だったっけ……」

腕や足をみても、俺が今身に纏っているはやはり制服だ。

「とりあえず歩いてみるか」

しかしこの状況はかなり妙だ。人っ子ひとりいない。

「うん。やつぱり今日は休みだ。帰ろう」

俺はとつと帰ってしまおうと歩みを速めた。

「ひーきーがーやー」

「うっ」

後ろから首根っこをむんずと掴まれた。

「部活動を堂々とサボろうとするとはいい度胸だなあ？比企谷」

声から判断するに、俺の首を掴んでいるのは平塚先生だ。ほぼ毎日会っているはずなのに、何となく懐かしい感じがする。

「いや、違うんですよ。学校に誰もいないから」

「はあ？君は何を言っているんだ？」

「え？」

平塚先生との会話が噛み合わない。なんだこれ。

「とにかく、さっさと部室へ行きたまえ」

「はい……」

後ろを振り返ると平塚先生の姿はなかった。

気づくと部室の前に俺はいた。遠慮なしに部室のドアを開き、いつものように挨拶をする。

「うす」

「あん！あんっ……！はあん！だめえっ！あつ、あつ、やん……」

「はあ……はあ……んっ……んっ……んっ……んっ……」

俺の目に飛び込んできたのは床に四つん這いの体勢で喘いでいる奉仕部の部員達。

由比ヶ浜は制服を捲り上げられたのか、豊満な胸を惜しげも無く晒されて、後ろからガンガン貫かれている。

雪ノ下の上半身には白のブラジャー。下半身にはスカートといつも履いている黒のソックスだけ。形の良い尻を丸出しにされ、由比ヶ浜を貫いている男に中指で性器を愛撫されている。

「比企谷、気に入ってくれたか？奉仕部丼だ」パンパンパン

学校の部室で3Pを敢行しながら俺にそう声をかけてきたのは葉山隼人その人である。

「あつ、あんっ！ヒッキー……はずかしいよ……やん……ああんっ!!」ズツポズツポ

由比ヶ浜は葉山のピストンをその身に受けて、胸をぶるんぶるんと揺らしている。俺に見られていることが恥ずかしいのか、その顔はみるみる真っ赤に染まっていく。

「んっ……んんっ！比企谷くん……見ないで……あああッ！お願い……」グチュグチュ  
雪ノ下は葉山の愛撫の快感に必死に耐えながら、俺にそう懇願した。

「雪乃ちゃん。これがほしいのか？」ズブツ！

葉山の声と共に、由比ヶ浜の身体から抜かれた剛直が、雪ノ下の身体に突き立てられた。

「はあっ……あん！んっ！んっ！」パヂユツパヂユツ

雪ノ下は俺の存在を忘れたように蕩けた顔で嬌声を発する。

「はあ……はあ……はあ……葉山くん……葉山くんっ！」ズチユズチユ

「一番奥、好きだろ？」グリグリ

「はあん……♡すごいつ……んっ……んんんんっ！」ビクツビクツ

葉山が雪ノ下の一番奥にペニスを擦るような動きをすると、雪ノ下は一瞬で絶頂を迎える。雪ノ下は肘を床について、下を向いてビクンビクンと身体を震わせている。

「隼人くん……あたしにも……」

由比ヶ浜が葉山の方を振り返りながら、奴を誘うように大きい尻をフリフリと振る。

「結衣もすぐイかせてやるよ」

「んっ……はあ！」ズブン

雪ノ下からゆっくりと焦らすように抜かれたペニスがまた由比ヶ浜に突き刺さる。

「結衣はここだったな」ズンツ

「ふああ……♡そこ、いいのっ……隼人くんっ！もっど……！」

由比ヶ浜は弱い所を突かれ、すっかりメスの顔で乱れている。大きな胸

「ああん……んあ……いくっ……いくっ……！あああああっ……♡」ビクンビクン

由比ヶ浜は背中をを後ろに撓らせてエクスタシーに達した。

行為が一段落して、葉山は俺がいつも座っていた椅子に座った。雪ノ下と由比ヶ浜は何も言われていないのに葉山の下へ四つん這いで這っていく。そして二人は葉山の近くに跪いた。おい……まさか……。

「ちゅ……ちゅぱ……んっ……じゅるる……じゅるっ、はあ……」

葉山の一物に奉仕を始めた。雪ノ下は竿の部分を下から上へ丹念に舐めあげていき、亀頭に到達すると、一気にそれを頬張った。

「……ちゅ……ちゅ……ちゅっ……ちゅぱっ、しゅるっ、じゅる」

由比ヶ浜は葉山の玉の部分に何度も何度もキスの雨を降らせた後、舌で同じ部分を舐める。

葉山は二人の頭に手を置いて、ナデナデと慈しむように撫でている。

「じゅる、ちゅぱ……んっぱ、由比ヶ浜さん……」

「……れろ……れろ……うん……しゅる……」

二人は一度葉山の性器から顔を離れた。位置を交換するつもりなのだろう。由比ヶ浜はその大きな胸で葉山のモノをはさみながら口で啜えた。雪ノ下は葉山の玉の辺りを舐め始めた……。

葉山……。最高だぜ……。そんな感情が浮かんできて俺は全てを思い出した。これは間違いなく夢である。俺は寝取られ好きになったんだ。それ故にこんな突拍子もない夢を見ている。しかし、かなりこの夢はそそるものがある。だからもう少し醒めないでくれ。

「出るー」ビュルルル

葉山のペニスがまるで自分の意思を持っているかのように震動する。葉山が放出した精液が二人の顔にかかった。その量はおよそ人間が出す量を超えており、顔だけでなく胸にもかかっていた。



## 番外編② 5話のその後 葉山・雪ノ下視点

俺は比企谷と別れた後、手早く服を着て車の後部座席から降りるが、雪乃ちゃんは震える手で服をゆつくりと着てから出てきた。

その足取りはフラフラと覚束無い。

10連続でイカされた後だ、無理もない。雪乃ちゃんの腰に手を回し歩行の補助をしてあげた。

その時、程よくくびれた雪乃ちゃんの腰を軽く堪能したのは内緒だ。

雪乃ちゃんも1人で歩くことができないことが分かっているのか、素直に身体を俺の方へ預けてくる。

そのままマンションのエレベーターに乗りこみ、雪乃ちゃんの部屋に入る。

「ん、はあ、ちゅ、れろ、っんっ……♡」

部屋に入り、ドアが閉まった瞬間、彼女の顔を両手で掴み、ディープキスをお見舞いしてやる。

雪乃ちゃんは足をかくかくと震わせ、膝から崩れ落ちそうだったため、彼女の腰を両手で抱き止める。

「……それで、比企谷とは別れるつもりなのか？」

「わ、わかれないい……」

雪乃ちゃんは唇を震わせながらも、何とか声を絞り出す。

そんな様子を見て、俺はふうとひと息つき、

「正直、あれはないぞ。彼氏として不適合すぎる」

俺がそう言った瞬間、そんなことないと言わんばかりにキツと雪乃ちゃんの眼光が鋭くなる。

「じゆるる、ちゅ……しゆる……ハあ……ん、ちゅ……はあ……♡」

俺がさつきより彼女の唇を強めに啜ったため、雪乃ちゃんは前後不覚になったようにその両眼を虚ろにする。

「ジーパンと下着だけ脱いで」

「……はあ……はあ」

雪乃ちゃんは息を切らしながら、まるで催眠にかかったように、俺の指示に従う。

ジーパンを脱ぎ、そのまま床に放置する。そして彼女は下着に手をかけ、両足を片足ずつ上げて脱いでいく。

それと合わせるように俺も服を脱いで全裸になる。

バサツと服が落ちる音で雪乃ちゃんが我に返ったのか、頬を赤らめ恥ずかしそうな素振りでケーブルニットの裾を引っ張っている。

そんなのお構いなしにお姫様抱っこで雪乃ちゃんを抱えあげる。その間も雪乃ちゃんは必死に服の裾を両手で押さえていた。

今からそんなものを剥ぎ取って、ドロドロに溶け合うようにセックスするということに。

「寝室は？」

「……」

雪乃ちゃんは無言で目を伏せ、寝室の方向を指差した。

勃起した俺のモノはそそり立ち、雪乃ちゃんの背中を小突くようにツンツンとあたっている。

寝室に付いたらそのままベッドの上に優しくポフンと雪乃ちゃんの身体を降ろした。

「その、1ヶ月間したことにはしない？」

雪乃ちゃんは最後の抵抗とばかりにそんな世迷言を抜かしてきた。

「したこことって？」

「わ、私たちがセ、セックスをしたことに……」

「……」

雪乃ちゃんの剥き出しになった太ももを軽くなぞる。雪乃ちゃんは抵抗するように両手で俺の手を抑えるがその力は弱々しく手は止まらない。

「あつ……ま、まって……」

おかまいなしになぞらせる手を体の上部へ持つていき、ケーブルニットの裾をデコピンの要領で強めに弾く。

「ああつ……」

ケーブルニットの裾がふわりと舞い、雪乃ちゃんは裾を抑える。下着はさつき脱がせたから、性器が露になるのを嫌ったのだろう。

俺は雪乃ちゃんの肩を掴むとそのまま後ろの方へ押し倒し、覆いかぶさってやる。

「そんなことして、俺になんのメリットが？」

「あなたも不本意でしょう？こんなことさせられて……」

「そうかな？」

俺は少しずつ雪乃ちゃんの方へ顔を近づけていく。

雪乃ちゃんも肩を抑えられているため、逃げられず、ただ弱い力であたふたするだけだった。

2人の唇同士が触れそうな距離でわざと止めてやる。吐息がかかる距離でただ静止して雪乃ちゃんの眼をじっと見つめる。

唇を少しだけ触れさせ、あえて離す。それを何回か繰り返してやる。

すると、雪乃ちゃんの両眼に涙がうつすらと浮かぶ。たまらなくなつて雪乃ちゃんが眼を閉じる。

「ちゆる……んちゆ、んっはあ、だめ……ふ、っ……ちゆ……♡」

瞬間、顔を傾けて唇をこれまでより深く口づけをしてやった。

雪乃ちゃんの目はトロンとなり、パワーとした表情を作る。

服の裾から手を差し入れ、片手でブラのホックを外して、そのままスルッとブラを剥ぎ取つてやる。

「あっ……」

まだケーブルニット本体は残っているものの、最後の装備を失つたように目を見開いた。もちろんその間もキス地獄は続いている。

「ちゆる……ちゆる……ふう……ちゆる……ちゅ……♡」

「わ、分かったわ……1ヶ月するのは分かったけれど……今日はもう休ませて……その、昨日からずつとしているのよ……?」

「……」

俺はそんな彼女の言葉を無視し、少し身体を下の方へずらすときつちりと閉じられた雪乃ちゃんの両足に手をかけ、勢い良くガバッと足を開かせた!

「あつ……ちよ……つ……」

足を開いたせいで、M字開脚の体勢になり、その使い込まれていない淡いピンク色の性器が露になる。

高校時代関係が冷え込んでいた際、周囲を凍てつかせてしまう眼光で見てもあった彼女をそんな情けないような格好にしている現状に己の性器がバキバキと硬度を増したのを感じた。

俺は彼女が両手でそれを隠してしまいう前に、中指をスルッと性器の中へ侵入させる。

「そういえばまだこれはしてやってなかったかな。これに耐えられた子は今のところいないよ。車の中では使わないで置いてあげたのにな。ホント比企谷って馬鹿だよな」

葉山隼人必殺の手マンが雪ノ下雪乃に襲いかかろうとしていた。

## ——以下雪乃視点——

「……」

前後不覚になる程のキスから開放された私は、そんなの耐えてみせるとばかり意気込んでスンという表情を作る。

「……」グチュツ

「……あ」クチュツ……クチュツ……

その一瞬で悟った。これは続けさせてはダメな行為だ。

「あ……あ……あ……アアン……♡」ズチュズチュ

およそ自分の口から出たとは思えない甘美な声に驚き、片手で口を塞ぐ。もう片方の手で自分の性器に挿入された葉山君の手を振り払おうともがくが男と女では絶対的に力の差があり、無駄な抵抗に終わってしまう。

「……はあ……はあ……はあ……はあ……だめ……！ イっ……♡」グツチュグツチュ

「だーめ」

葉山君は言うと同時に私の中に入れて激しく動かしていた中指をピタッと止めた。

「さて質問です、これを何百回と繰り返したら女の子はどうなるでしょうか？」

「はあ……はあ……はあ……♡ そんなの……壊れちゃう……」

「正解だよ」

「あつ……あああ……♡ 分からなくなる……♡」ヌチュツヌチュツ

「こんなのを1ヶ月続けられたら……比企谷くん……」

そして幾度となく絶頂の寸前を繰り返された結果……

「今後俺のこと隼人君って呼ぶならイかせてあげるよ」

「隼人君♥隼人君♥隼人君♥」

「よくできました」

「アツ……あつ……や……あああああアツ!!」グチュグチュグチュ

「あいつの前でも隼人君呼びするようにな」

「……はあ……はあ……はあ……♡」

待ち望んだ快樂にビクビクと身体が震えるのが分かる。絶頂した瞬間にスルリと残りの服であるケーブルニットを剥ぎ取られてしまい、全裸にされてしまったが、そんなことを気にする余裕は今の私にはない……。



「ん……あ……あああつ……！」ズリユツズッポ……

隼人君の鍛え上げられた逞しい身体が私に覆いかぶさってきて、そのまま正常位で貫かれた……！

このプレイをあの比企谷くんにさせられ始めてから少し大きくなった私の胸が隼人君の胸板にあたり、ひしやげるように形を変える。

「あつ……あん……あつ……んっ……っ♡」

リズムの良いピストンに脳内がぐわんぐわんと揺らされているような感覚に陥る。絶頂の連続から戻ってこられない。

「はっ……♡やと♡くん♡」

ダムが決壊したように隼人君の名前を呼ぶ。まだ彼氏である比企谷くんの下の名前でも呼べてないのに……。それなのに隼人君は下の名前で呼んで、あまつさえセックスまでしているという背徳感から、ゾクゾクつという感覚が背中全体に走る。

「なに……？雪乃ちゃん」

余裕たつぷりにすましたような表情で隼人君は私への楔を打ち込み続ける。

「ん……はア……」グリグリ

男性器の先つぽをグリグリと一番奥に押し付ける動きに私はたまらず、縋るように自分の両手を彼の逞しい背中へ回してしまう。

「ここ、好きだろ……」グリッグリッ

「好き♥好き♥」

「俺のことは？」

「……っ……そんなこと……言えない……」グリグリ

イヤイヤするように首を横に振り抵抗を試みる。

「ふーん、そんなこと言うんだ」

「……っ……隼人君、あなた、また……っ……イッ……♥」グリグリ

隼人君はニヤリと笑みを浮かべ、当たり前のように寸止めしてきた……。

挿入状態でさつきと同じことを……！

もうこれ以上は本当に体力が持たない……。

「す、好きよ……隼人君……」

「いい、ねっ」

「はあ♥すご♥すぎる♥あっ♥あっ♥あっ♥あっ♥あああああっ♥」パンパンパン

「……くっ！」ビュルツルル

昨日から何発目かわからない容赦の無い中出しが私を襲い、なすすべもなく私はそれを受け入れるしかなかった。

ヌツポといういやらしい音が室内に響きわたり、隼人君のそれが私の性器から引き抜

かれると、とろりと白濁色の精液がこぼれ落ちた。

「……さすがに疲れたな」

「……疲れたなんてものじゃないわ」

私と隼人君はさながら恋人同士のようにベッドの上に寝転がりながら喋る。

「明日から雪乃ちゃん部屋の中ではノーパンね」

「え……? どうして……?」

「俺の趣味だ」

「なによそれ、馬鹿みたいだわ」

「……従わないとまたアレをするからな」

「はあ……わかったわ……」

今後1ヶ月を考えると、先が思いやられる。

私はそれを表現するようにこめかみに手を添えた。

## 8話

俺と雪ノ下は日曜日に町へデートに繰り出すことにした。今日、雪ノ下は髪型を長い艶やかな黒髪をポニーテールにしている。

服装は上は白色のフリルブラウス？とか言うんだったか。とにかくふわふわしたブラウスだ。下はブラウンのワイドパンツを履いている。ファッション誌のモデルにも見紛う姿にただただ感服するのみ。

「……今日の髪型、いつもと違っていいな」

「あら、あなたからそんな気の利いたセリフが出てくるとは思わなかったわ」

「うっせ……」

雪ノ下のマンションから出ると同時に、雪ノ下が俺に腕を絡めてきた。

「……」

「ああ、これ？」

彼女らしからぬスキンシップに違和感を覚え、フリーズしてまじまじと彼女を見てしまふ。

すると、雪ノ下が何かを察したように説明を始める。

「隼人くんと出かけるときはこうしていたから。いいでしょう?」  
「……まあ、いいんじゃないかねえか」

不意打ちにも程がある。

雪ノ下が葉山に変えられてしまったようで、俺の脳に快感が響き渡る。

ようでというか、まあ、色々と実際変えられている訳だが……。

この分だとあの1か月の強化合宿で他にも色々と仕込まれてそうだな……。

俺たちは昼食をとった後、ゲーセンに行った。

その後は買い物なので時間を潰し、夕方頃ラブホへ行くことになった。

そういえば雪ノ下とラブホに来るのは初めてだな……。

うわっ、つまりこれがラブホデビューってことじゃん。今までは雪ノ下の家でセック

スをしていたからな……。

「……………ここでいいかしらね」

「……………」

ラブホの受付に行き、手際よくパネルを操作する雪ノ下を見ると、ああ、葉山にやはり色々と経験させられたんだなあ……と感慨にふけてしまう。

右手を顎に当て、少し考えていた雪ノ下がパネルをタッチして部屋を選ぶ。そしてその横で棒立ちの俺。

部屋に入ると、俺が先にシャワーを浴びた。

雪ノ下がシャワーを浴びている間、ベッドに座っている俺は、葉山が送ってきた大量の動画の中から厳選した一品を再生する。

これをキメてからセックスに臨むと感度が当社比で3割増しなんだ。許せ。

危ない葉みたいに言ったが、実際、雪ノ下の寝取られ動画を見ると脳内麻薬がドバドバ出てくると思う。

雪ノ下が無事帰ってきたので、今では葉山が送り付けてきたコレクションを漁る余裕もできた。

葉山の影響で変わってしまった彼女に思うところもあるが、葉山には感謝してもしきれない。

再生したのはベッドの上で葉山が雪ノ下に覆いかぶさり、雪ノ下は素っ裸の状態で正常位の体勢で貫かれている動画だ。なんて事はない普通の動画だと思った諸君は浅い。

「はぁ……はぁ……♡」

頬を紅潮させ、トロンと溶けたような目をした雪ノ下が、ゆったりとしたピストンをその身に受け続けている。その動きに合わせ、雪ノ下の程よく膨らんだ形の良い胸がぶるぶると揺れる。

まるでそうするのが当たり前の夫婦のように雪ノ下がセックスを受け入れている現

実に俺はなんともいえない興奮を覚える。もはや抵抗する気力もないのか、雪ノ下の両手はただ快楽に耐えるためだけにシーツを掴んでいるだけである。

スマホのカメラは雪ノ下の方を向けられているため、葉山の表情は分からないが、間違いない興奮しているだろう。

しかし、葉山らしくもないスローなセックスだな……。

「あッ……」

不意に葉山の指が雪ノ下の乳首を摘み、コリコリと感触を確かめるようにこねくり回し始める。

その動きに呼応するように雪ノ下は首を左右に振った。

「ひぁ……あん……」

しかし、快感を拒否するような彼女の仕草と裏腹に、乳首は先ほどと比べ明らかに立ってきてしまっている……。

「はアッ……♥」

葉山は仕上げとばかりに雪ノ下の乳首を人差し指で強く弾くと、雪ノ下はひと際大きい嬌声を上げる。

「俺はこういうセックスもできるんだよ」

「……」

「……」

葉山が動き方を変えたのか、ずりゆつ、ぐちゆつ、ぬぷつという音だけが動画の中で響き続ける。

「んあ♥」

「……」

ずりゆ、ぬちゆ、ぐちゆ、ぬりゆつという水音が動画を通して部屋に響く。

「……ど、どうして……ゆつくりなのに、こんなにい……♥」

「……」

ぐちゆつ、ぐちゆつ、ぐちゆつ

ゆつくりとした音だが、ぐちゆぐちゆという水音が大きくなっていつの間にか、雪ノ下の下半身がさらに濡れていつの間にかは間違いない……。

「はあ♥こんなの……♥」

「……」

ぐちゆつ、ぬりゆつ、ぐちゆぐちゆつ

「知らない♥気持ち♥良いいい♥」

「……」

ぐちゆぐちゆぐちゆつ



「ああああああ♥」

絶え間なく与えられる快感に、雪ノ下の表情はさらに余裕のないものになっていく。目を細め、首をのけ反らせたのを見るに、絶頂に達してしまったようだ。

なんてことはないゆつたりとした前後運動だけなのに、なぜこんなに違いが出てしま  
うのか。

やはり身体の相性というやつだろうか……。

「すごい♥すごいすぎる♥隼人くん♥」

「……ありがとう、雪乃ちゃん、くっ」

「ああ♥なかはあ♥ああ……♥そんなに押し付けしないで……♥」

その言葉から察するに当然のように二人が生でセックスしていたのは間違いない。

さらにこの中出しだ。葉山は己の腰を雪ノ下に限界まで密着させ、葉山の精子が彼女  
の子宮めがけて力強く放出されていく……。

「また……何をやっているのかしらこの変態谷くんは」

「うおっ」

いつの間にかバスルームから上がってきていた雪ノ下が背後から俺のスマホを取り  
上げた。

白色のバスローブ姿の雪ノ下雪乃。なんというか……ラブホにこなれてる感が出て

いてとてもエロい。

俺？下半身にタオル巻いてるだけの原始スタイル。

「はつきり言って全部消してほしいと言いたいところなのだけれど……」

「……そ、それだけはあ……」

「……その捨てられた子犬のような眼はやめなさい。あまりに無様だから」

「バツカお前、寝取られ好きにとつてその動画たちにどれだけの価値があるか分かってないだろ。億単位だよ億」

「はあ……そんなことはどうでもいいから、はやくやりましょう」

興味を失ったように俺のスマホをポイツとベッドに投げてから、雪ノ下はセックスをしようと誘ってきた。以前の彼女ならセックスのことをそんな風に表現しなかったのに……。

「……おう」

「……」

俺の答えに小悪魔的なニヤリという笑みを浮かべ、雪ノ下はバスローブを脱いで裸になった。

あ、やっぱり下に何も着けてないのね……。ふと雪ノ下の下腹部に目が行く。

動画内の雪ノ下はそこで葉山の精を受けていた……。ずっとピルを飲んでいたと

言っていたから妊娠の心配はないだろうが、そんなことは関係ない。何度も何度も精子を出しされているのだ。

その事実には俺は思わずゴクリと生唾を飲み込んでしまう。

「うおっ……と」

「何を固まっているの、私の裸体を見て固まるなんて男らしくない」

不意打ち気味に雪ノ下に押し倒され、ベッドに仰向けに倒れこむ。そのまま雪ノ下に覆いかぶさられた。

これも以前の彼女からは考えられない行動だ。貸出しプレイをする前の雪ノ下はセックスについても極めて奥手で、受け身が基本だった。

「ん……」

「……」

その体勢のままで顔を近づけてきた彼女がキスの雨を降らせてきた。キスの仕方も明らかに上達している。一体どこまで葉山の色に変えられてしまったのだろうか。そういうえば雪ノ下は何でも上達が早かったな……。性のテクニクについても例外ではなかったということだろう。

「……………ん……………あ……………」

「……………」

キスをしながら雪ノ下の貸出しプレイをする前と比べて明らかに膨らんだ雪ノ下の胸に両手を伸ばし、大胆に揉む。葉山がしていたように雪ノ下の乳首にも指をかけ、軽くコリコリと摘まむ。

「……………んっ」

「……………」

しかし、思っていたより軽い彼女の反応に、俺は動揺してしまう。

「……………ん、ん、ん」

「……………」

キスをやめた後も雪ノ下の乳首を攻めた。雪ノ下も声を上げ、気持ちよさそうに目を細める。よし、そろそろ濡れてきたころだろう……………と雪ノ下の下腹部に手を伸ばす……………。

「……………え？」

「……………」

なんと雪ノ下のヴァギナは乾ききっていた……………。

あまりの驚きに声が出てしまう。以前の彼女相手であれば、これくらい愛撫すれば、

挿入に十分な程は濡れていた。

くそ、これも葉山とのセックスの影響か……。脳に急速に血が集まっていき、快感にも似た感覚を覚える。

葉山と同じようにしているのに何が違うのか……。雄として完璧に負けたような気分になる。雪ノ下も不安そうな目をこちらに向けてきている。

「……」

「……」

愛撫を続行するのもありだが、散々愛撫に時間をかけた挙句、雪ノ下が濡れていないと俺の心が折れてしまう。このまま挿入しても良いが、雪ノ下が痛がるだけだろう……。体を起こし、部屋に備え付けられた避妊具の横にローションが置かれているのが眼に入る。これだ！と思ったローションに手を伸ばす。

「あ……比企谷くん。入れるのはいいけれど、避妊具はつけてちょうだい」

「……ああ、分かってる」

葉山には散々生セックスも中出しも許したくせに！と言いたくなるのを必死でこらえ、俺は避妊具をいそいそとつけ、ローションを垂らす。

「……ん」

「……」

ローションを使ったおかげか、比較的あっさり挿入はできた。

しかし、そのまま正常位の体勢で前後運動を始めたところで、俺は若干の違和感を覚える。

……違う。

ローションを使ったからあっさり入ったんじゃない。雪ノ下が葉山のもとから帰ってきた時には分からなかったが、明らかに彼女の性器の形が変わっている……！

葉山のペニスの形に合わせて、雪ノ下の性器が変化していたんだ……。

「……んっ、んっ」

「…………ぐっ」

しかも性器が広がって形が変わっただけじゃない。ひと突きごとに雪ノ下の性器のひだが俺のモノにまわりついてくるのが分かる。

雪ノ下の性器が男の精液を搾り取るため、レベルアップしている。

『彼女を旧友に1か月貸し出したら、彼女の性器がサキュバス並みにレベルアップしていた件について』とか言ってる場合じゃない……。

いや、そんなこと考えてる場合じゃない……。

「んっ、あっ」

「……くっ、出る！」

十回ほどピストンを繰り返したところで、あっさりと射精させられてしまった。俺の背中に両手を回し、眼を閉じて肩で息をしているが、葉山とのセックスに比べ、もの足りないことは明らかだ……。

「……焦らなくていいわ」

「……」

「……あなたが隼人くんと比べて劣ってる訳じゃない。単に経験が足りないだけよ」

「……すまん」

彼氏以外の男、しかも因縁のある相手に1か月も貸出し、色々と魔改造されるのを許してしまった俺。そんな俺を励ましてくれる雪ノ下に少し泣きそうになってしまう。

本当に彼女には頭が上がらない。

ラブホの利用時間が終わったので、雪ノ下と手を繋いで、ラブホを出る。そんな俺たちを遠くから見ている影があった。

「……」

雪ノ下陽乃。雪ノ下雪乃の実姉にしてまたの名を魔王。

その陽乃の手には、雪ノ下雪乃と葉山隼人がラブホから出てくる写真が握られている。彼女はスマホを操作し、通話を始める。

「ちよつとなんで国際通話なの……あつ、隼人——？ちよつと訊きたいことがあるんだけど」

「……ああ」

その後の会話を知るものは、この場にはいない。

### 実績解除

『比企谷八幡・寝取らせの代償』

#### ★ルート解除★

雪ノ下雪乃と結婚することで、

『雪ノ下家の一族』ルートに突入します

#### ★ルート条件★

雪ノ下雪乃が実績『良質な母体』『肉欲の虜』『NTR妻の素質』を保持した状態で雪ノ下雪乃と結婚すること